

●論文（査読を経たもの）

With コロナ時代の「理想の仕事」 に関する調査研究

シャザディグリ シャウティ
夏扎提古丽・沙吾提

目次

はじめに

I. 本研究の枠組み

- (1) 問題の所在と本研究の目的
- (2) 本研究におけるライフスタイルの定義と測定項目

II. 研究の方法

- (1) 調査方法とサンプリング
- (2) 分析の方法

III. 研究結果

- (1) 新型コロナ時代の「理想の仕事」について
- (2) 理想とする仕事を規定する要因
——従来の研究との比較を中心に
- (3) ライフスタイルの類型と「理想の仕事」

IV. 結論と考察

キーワード

理想の仕事 (ideal job)

ライフスタイル (life style)

日本 (Japan)

With コロナ時代 ("With Corona" Era)

●ARTICLE (REFEREED)

Research and Studies on the Ideal Work in the "With Corona" Era
by SHAZADIGUL SAWUT

はじめに

国連の推計によると、世界の人口は2019年の77億人から2030年の85億人（10%増）へ、さらに2050年には97億人（同26%）、2100年には109億人（42%）まで増加するという（United Nations, 2019）。

これに対して、日本では既に人口減少が始まっており、2050年には1億192万人、2100年には8000万人を下回ると予想されている（国連, 2019）。同時に、高齢化率が上昇を続け、2065年には、日本国民の38.4%（約2.6人に1人）を65歳以上の高齢者が占める社会が到来すると推計されている（内閣府, 2018）。また、2030年に合計特殊出生率が2.07まで上昇し、かつ女性がスウェーデン並みに就労し、高齢者が現在よりも5年長く働いたとしても、2060年には労働力人口は5,500万人程度まで減少すると予測されている（内閣府, 2014）。

一方、中国統計局によると、中国でも、高齢化が進み、2018年末時点の60歳以上人口は2億4,900万人、総人口の17.9%を占め、日本の総人口の約2倍になる（党後武ら2019）。さらに、2030年までに労働人口は7,000万減少し、継続的な経済成長に及ばず影響が大きいことが予測されている（馬忠東ら, 2011）。2016年1月1日から一人子政策が廃止された（張車伟, 2016；王非ら, 2016）が、すぐにベビーブームが来るとは考えられないので、労働人口の高齢化や減少を解決することは容易ではない。

人手不足の解消のために、AIやロボット等の技術は進化し、定型労働に加えて非定型労働においても省人化に貢献する。バックオフィス業務等、日本の雇用のボリュームゾーンである従来型のミドルスキルのホワイトカラーの仕事は、大きく減少していく可能性が高い。将来的には、日本の労働人口の49%がAIやロボットなどで代替可能になるという研究レポートが発表されている（野村総合研究所, 2015）。

他方、日本では、労働人口を増やすために高齢者雇用や女性の活躍、保育施設の増加、高度外国人材の受け入れ等、様々な施策が行われている。AIの普及やデジタル化の加速により、従来独立・対立関係にあったものが融合し、変化することで、サイバー空間とフィジカル空間が高度に融合し、経済、産業、文化から日常生活まで広い領域で相互に関連する複雑な課題を提起している。例えば、親や子供の介護、家族の病気、子供や親の送り迎えなど出産・育児とは別の理由で正規労働者として働きた

くも働けないなど、深刻な問題が顕在化し、柔軟かつ多様な働き方の実現への期待が高まっている。

この議論は、日本のみならず、世界中で巻き起こりつつある。ドイツの連邦労働社会省 (BMAS) は、2030 年の労働市場予測を発表し、少子高齢化を見据えて、移民による労働力供給に重点を置いた「デジタル化促進シナリオ」を提示している (BMAS, 2016)。

そんな中で世界を襲ったのがコロナウイルスの感染拡大である。1 年間、テレビをつけても「コロナ」、ネットを見ても「コロナ」、雑誌の表紙も「コロナ」、新聞も「コロナ」で、「コロナ」ばかりの 1 年だった。コロナで一変した世界。感染拡大防止のため、通勤頻度を減らし、公共交通機関の混雑を緩和させるべく、テレワークや時差出勤 (フレックス制度) などの働き方の推奨により、働き方も日常生活も大きく変わり、人との接触を極力避ける方向へシフトした。アフターコロナ時代においても「元の世界には戻らないだろう」と予想されている。いうまでもなく、アフターコロナ時代に生き残るためには、柔軟に新しい働き方を模索する必要がある。

理想の仕事は、出産や子育て、親の介護などの将来のライフイベントも考慮して、自分に最適な働き方を見つけたためのポイントであり、働きやすい社会や環境づくりのために、理想の仕事あるいは理想の職場環境などの概念のもとで調査研究がなされてきている。人々の理想の仕事に関する関心が集められたのは、比較的最近のことである。

働く人々の就業意識に関する調査研究や転職理由に関する調査研究として、NHK が 1973 年から行っている「日本人の意識調査」と、内閣府が 2000 年から行っている「国民生活に関する世論調査」がある。また民間でも、株式会社インテージ、リクルート、アーキ・ジャパン、アデコグループ等、リサーチ会社や HR 人材会社、就職・転職エージェントなどが様々な側面から調査している (インテージ, 2020; NHK, 2020; アデコグループ, 2020; maimaidata, 2020 等々)。

しかし、学術研究は、高橋の「働くことの意識についての研究の流れと今後の展望: 日本人の職業観を求めて」(2006) と田靡らの「仕事の価値の布置と長期的変化: 「日本人の意識」調査の 2 次分析」(2015)、田靡の「日本社会における仕事の価値の長期的な推移」(2017) などわずかであり、しかもそれらは理論研究や既存データに基づく分析研究に止まっている。特に、コロナ流行後の日本人の理想の仕事に関する学術研究はまだ空白な状態にあると言えるだろう。

理想の仕事は仕事環境の状態や質の良し悪しを反映しているだけでなく、人々が自分の仕事や職場環境をどのように認知し、どのように受け止めているかを表す指標

である。働きやすい社会や環境を評価する重要な指標であり、世の状況に合わせた柔軟な働き方の実現可能性を図る重要な指標でもある。アフターコロナを見据えた日本人の理想の仕事に関する研究は、時宜を得た課題であると認識する。

そこで、本稿では、日本全国における WEB 調査から得られた結果の一部を用いて、日本人にとっての理想の仕事の実態とその構造を明らかにしたい。

I. 本研究の枠組み

(1) 問題の所在と本研究の目的

本研究では、ライフスタイルが、日本人の理想の仕事（仕事観）に及ぼす影響を明らかにすることを目的としている。ライフスタイルの概念の詳細については（2）とⅢの部分で述べる。いくつかの調査研究事例を紹介してみよう。

日本や中国における調査研究では、時代の変化と共に、人々が思う理想の仕事が変化していることが明らかにされており、性別、国、地域、職種による差異が無視できないことが明らかにされている（内閣府、2019；NHK、2020；maimaidata、2020）。また、若者に注目した調査研究では、若者は仕事を選ぶ際に「自分にとってやりがいがあること」、「地域や人に貢献できること」を大事にしており、収入、社会的地位・評価等よりも、やりがいがあり社会的意義のある仕事を希求していることが明らかになっている（東北活性化研究センター、2013）。

コロナの影響に注目した WEB 調査として、アデコグループが 2020 年 5 月に日本、米国、英国、ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、オーストラリア等における 18 歳から 60 歳までの 8000 人（各国 1,000 人に対し調査を実施）のオフィススタッフを対象に行った調査が注目される。コロナの影響により、働く人々はアフターコロナの働き方により高い柔軟性を求めており、労働時間の半分（51%）をオフィスで過ごし、残りの半分（49%）をテレワークで勤務するという働き方は、地域や性別、親との同居状況といった条件に関わらず、共通して求められている（Adecco Group、2020）。

他方、ライフスタイル研究は、マーケティングの領域を中心に発展してきたが、近年では高齢者研究を含むさまざまな領域でライフスタイルの観点からの研究が進められており、メディア研究においてもライフスタイルに着目した研究が試みられている（シャザディグリ 2014）。しかしながら、主に健康問題や余暇活動との関連でライフスタイルが取り上げられており、社会学の領域においてもライフスタイル研究は緒に着いたばかりである（Hendricks and Hatch、2006；シャザディグリ、2014；綿貫、2014）。また、社会学研究では、メディア利用とライフスタイルの関係や余暇活動とライフスタイルの関係に関心がもたれてきた（Novak、1990；シャザディグリ、2014 等）が、ライフスタイルの

仕事への影響に焦点を当てた研究は見られない。

(2) 本研究におけるライフスタイルの定義と測定項目

マーケティング研究において購買行動が性別や年齢、職業、所得などの違いよりも、ライフスタイルの違いによって、より大きく左右されることが明らかになっている。また、筆者がこれまでの研究において、メディア接触行動という消費者行動においてもライフスタイルの影響が大きいことを立証している(シャザディグリ, 2014)。本稿では、ライフスタイルが理想の仕事(仕事観)に及ぼす影響の大きさを人口学的・社会的属性との比較から明らかにする。

まず、ライフスタイルの概念を明確にしておきたい。ライフスタイルの概念と測定尺度に関してはこれまでも数多くの議論と提案があるが、未だに公認の定義とみなされるものはない。しかし、共通するところは、ライフスタイルは活動(activity)と興味・関心(interest)、態度・意見(opinion)によって形成される生活パターンと見なされていることである(シャザディグリ, 2014)。そこで、本稿では、日常生活行動と生活態度(現代社会に対する態度・意見)からライフスタイルを類型化し、測定尺度を作成する。興味・関心に関しては、それが行動となって現れるときに、その個人の生活パターンを形成すると考え、あえて独立させることをせず、その代わりに多様な日常生活行動をとりあげる。更に、本研究では、これまでにマーケティング領域、社会学領域、心理学領域で行われてきたライフスタイル研究の検討(シャザディグリ, 2014)を基に、ライフスタイルと理想の仕事の分析モデルを作成した(図 1)。個人属性や社会文化的属性要因の影響で形成されるライフスタイルの違いによって仕事観が異なり、理想の仕事もライフスタイルの形成に影響するというのがこの分析モデルの基本的な考えである。

そして、本研究では、生活態度を人々の現代社会に関する態度と意見であると定義し、Merton (1957) の適応様式の 5 類型と Tunstall (1965) の研究で用いられたアノミー尺度を参考に測定項目を作成した。また、今日の課題である高齢者の社会的扶養や私的扶養、子供や親の介護をめぐる問題、社会的・政治的無関心の意味を示すアパシーに関する項目、身近な生活空間である地域に関する項目を追加した。具体的には、小田 (2004) の研究とシャザディグリ (2014) の研究で用いられた社会観に関する 48 項目のうち、同調、伝統的権威主義、革新、儀礼主義、逃避、反抗、扶養、身近な生活空間としての地域に関する項目など 38 項目を日本で暮らす人々の生活態度を見る上で適切な指標であると判断し、生活態度の測定項目とした。但し、小田 (2004) は高齢者、シャザディグリ (2014) はサードエイジャー(言わば中高年)を対象にしているた

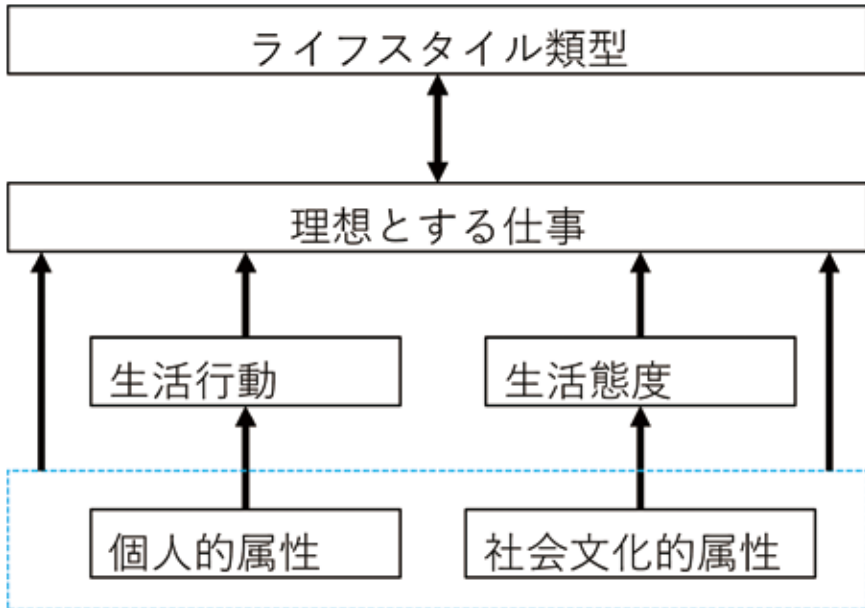


図1 ライフスタイルと理想の仕事の分析モデル

め、本研究では、若年層が回答しづらい項目は、どの年代の人も回答できるように修正・変更した。例えば、「職業を持っている女性が親の世話をしなければならなくなった場合には、仕事をやめるよりも、お金をはらって誰かに世話をしてもらったほうがよい」という項目を「子供や親の介護が必要になった場合、お金を払って誰かに世話をしてもらおうほうがよい」に修正したものである。「ピッタリ当てはまる」、「当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全然当てはまらない」の4件法で、それぞれに4～1を配点した。

また、本研究で生活活動を測定するために、主体がどのような生活活動を行っているかを測定指標として用いた。具体的には筆者が在職した株式会社インテージで消費者行動に関する調査研究で長年使われてきたChina-VALSの質問項目、JAPAN-VALSやVALAS2など（シャザディグリ，2014）を参考に生活行動に関する44項目を作成した。各項目の選択肢は、「よくする」、「時々する」、「殆どしない」、「全くしない」の4件法で、それぞれに4～1を配点した。それらを主成分分析によっていくつかの生活行動類型に集約し、それぞれの類型を構成する項目の合成得点を各生活行動類型の測定尺度にした。

Ⅱ. 研究の方法

本稿で扱うデータは、2020 年 3 月、日本全国の 20 歳から 69 歳までの人を対象に実施した WEB によるアンケート調査によって得たものである。

(1) 調査方法とサンプリング

日本における理想の仕事に関する学術調査研究は、緒についたばかりであり、とくに日本全国をカバーするデータは十分に蓄積されていない。そこで、本研究では日本人を代表とするサンプルを抽出するために、まず、日本全国の日本人を対象に「日本国籍」を持っているかどうかに関するスクリーン調査を行い、日本在住で日本国籍を持っている方を抽出した。次に、人口構成比に合わせた地域・性別・年齢による割り当て法で 20 才から 69 才までの人を対象に WEB にてアンケート調査を実施した^{注1}。その結果回収されたサンプル数は 1,837 人である。調査対象地域の人口構成と標本数は表 1 の通りである。

表 1 調査対象地域の人口と標本数

地域名	人口（人）	サンプル数（人）
北海道	3184352	84
東北地方	4889699	131
関東地方	27991565	636
中部地方	14439178	331
近畿地方	12947950	294
中国・四国地方	3708416	158
九州地方	8243784	203
合計	75404944	1837

¹ この調査はマクロミルのモニタ会員を対象に行った調査である。登録モニタを対象とする調査は「偏っている可能性」があり、属性で細かく割当て対象者をスクリーニングしても、原理的に確率抽出標本にならないため限界があるが、統計的検定を行うことで一般化可能性が見えてくる。

(2) 分析の方法

まず、理想の仕事の傾向とこれまでの調査研究で指摘されてきた諸要因との関連を確認するために、クロス集計分析とカイ2乗検定、相関分析を行った。

次に、生活態度（社会観）に関する38項目と生活行動に関する44項目を集約・類型化するために、主成分分析を行った。類型化された測定項目について、それぞれ共分散構造分析を行い、妥当性を検討し、生活態度と生活行動の測定尺度を作成した。そこで得られた生活行動11類型と生活態度9類型を用いてライフスタイルを類型化した。その際、生活行動、態度の各類型の得点を平均0、分散1になるように標準化し、それらを用いてクラスター分析を行った。有効回答票が1500を超えるために、階層的クラスター分析でのケースをもとにクラスター数を検討するのが困難であったために、事前にクラスター数を3から15の範囲で決め、K-means法によるクラスター分析を行った。そして、析出されたクラスターを用いてライフスタイルが人々仕事観にどのような影響を及ぼしているかを、理想の仕事（仕事観）を従属変数として、人口学的・社会的属性とライフスタイル変数を独立変数とするカテゴリカル回帰分析を行った。なお、本研究で分析に使用したソフトは、IBM SPSS Statistics 26とIBM SPSS Amos 26、及びIBM SPSS Categories 26などである。

Ⅲ. 研究結果

上記Ⅰで取り上げたように、これまでの理想の仕事に関する調査研究では、性別や年齢、地域、職種等による差異を無視できないという結果が得られているが、今回の調査でも、同じような分析結果を再現できるかを確認することが重要である。そこで、以下において、まず、これまでに行われた仕事観に関する調査研究で指摘されてきた諸要因による理想の仕事の差異があるかどうかをみることにした。なお、本研究で用いる各データの基本統計量は表2の通りである。

(1) 新型コロナ時代の「理想の仕事」について

日本人の理想の仕事の傾向を度数分布で表したものが図2である。全体として「仲間と楽しく働ける仕事」と「健康を損なう心配がない仕事」、「高い収入が得られる仕事」を理想とする割合が高く、これまでの調査研究の知見と若干異なる結果が得られた。

内閣府が2019年6月に行った調査では、「収入が安定している仕事」を挙げた者の割合が60.5%と最も高く、「自分にとって楽しい仕事」(57.6%)、「私生活とバランスがとれる仕事」(44.5%)、「自分の専門知識や能力がいかせる仕事」(37.8%)の順となっ

表2 本研究で用いる各データの基本統計量

	変数		平均値	中央値	最頻値	標準偏差	分散	変数 の標準 偏差	尖度	変数 の標準 偏差	範囲	最小値	最大値	パーセンタイル		
	有効	欠損値												25	50	75
性別	1837	0	1.50	1.00	1	0.500	0.250	0.057	-2.002	0.114	1	1	2	1.00	1.00	2.00
地域	1837	0	4.18	4.00	3	1.854	3.438	0.057	-0.191	0.114	7	1	8	3.00	4.00	5.00
年齢	1837	0	3.14	3.00	3	1.379	1.900	0.057	-1.220	0.114	4	1	5	2.00	3.00	4.00
未婚婦	1837	0	1.62	2.00	2	0.486	0.236	0.057	-1.769	0.114	1	1	2	1.00	2.00	2.00
子供の有無	1837	0	1.57	2.00	2	0.496	0.246	0.057	-1.931	0.114	1	1	2	1.00	2.00	2.00
通学年数	1837	0	14.24	14.00	16	3.127	9.776	0.057	3.221	0.114	29	1	30	12.00	14.00	16.00
学歴	1837	0	3.39	3.00	2	1.665	2.771	0.057	-0.639	0.114	6	1	7	2.00	3.00	5.00
職業	1837	0	4.90	4.00	3	2.375	5.642	0.057	-0.607	0.114	9	1	10	3.00	4.00	7.00
健康状態	1837	0	2.04	2.00	2	0.701	0.492	0.057	0.613	0.114	3	1	4	2.00	2.00	2.00
居住形態	1837	0	2.08	2.00	1	1.388	1.928	0.057	3.919	0.114	7	1	8	1.00	2.00	3.00
収入を伴う仕事経験	1837	0	2.66	3.00	3	0.530	0.281	0.057	0.619	0.114	2	1	3	2.00	3.00	3.00
仕事での最高年収	1784	53	5.34	6.00	6	1.428	2.039	0.058	2.470	0.116	6	1	7	5.00	6.00	6.00
理髪的な仕事	1837	0	4.91	5.00	5	2.679	7.174	0.057	-0.753	0.114	10	1	11	3.00	5.00	7.00
年収	1837	0	2.8508	3.0000	3.00	1.14740	1.317	0.057	-0.464	0.114	4.00	1.00	5.00	2.0000	3.0000	3.0000
一ヶ月の支出	1837	0	2.4447	2.0000	2.00	1.02784	1.056	0.057	0.094	0.114	4.00	1.00	5.00	2.0000	2.0000	3.0000
経済的にゆとり感	1837	0	3.08	3.00	3	1.108	1.227	0.057	-0.837	0.114	4	1	5	2.00	3.00	4.00
自由時間の多少	1837	0	2.6685	3.0000	4.00	1.15590	1.336	0.057	-1.428	0.114	3.00	1.00	4.00	2.0000	3.0000	4.0000
自由時間ゆとり感	1837	0	1.98	2.00	2	0.897	0.805	0.057	-0.513	0.114	3	1	4	1.00	2.00	3.00
自由時間を誰と一緒に過ごすか	1837	0	1.37	1.00	1	0.484	0.234	0.057	-1.728	0.114	1	1	2	1.00	1.00	2.00
現在の仕事への満足感	1837	0	2.83	3.00	3	0.986	0.972	0.057	-0.254	0.114	4	1	5	2.00	3.00	3.00
ライフスタイル類型	1837	0	3.83	4.00	2	2.008	4.031	0.057	-1.219	0.114	6	1	7	2.00	4.00	6.00

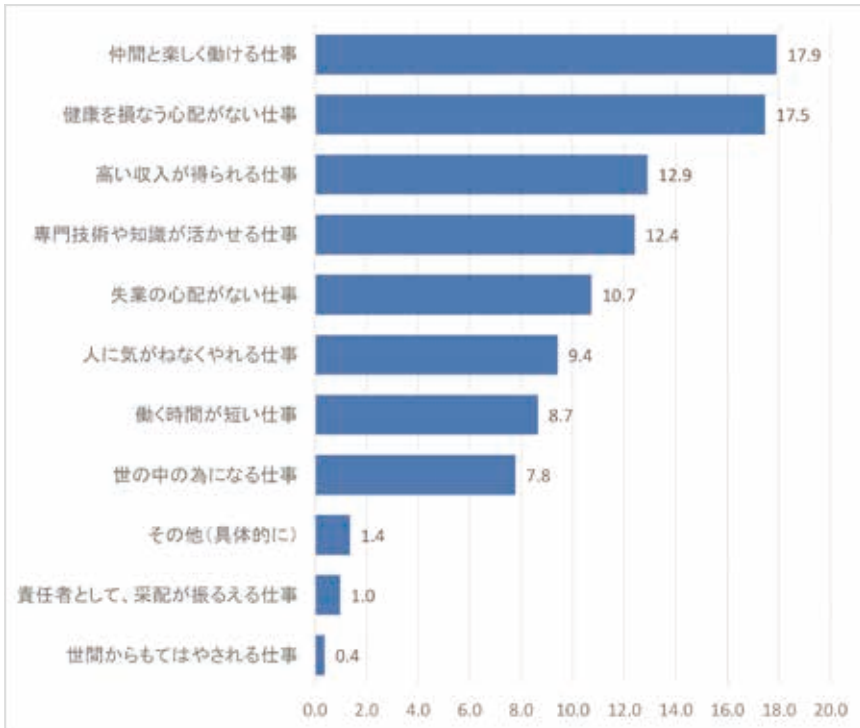


図2 日本人の理想の仕事 (単位: %)

ている。ただしこれは、複数回答形式の質問であるので、単純には今回の調査結果と比較できない。また、NHK (2020) が 2018 年行った調査では、第 1 位は、「仲間と楽しく仕事する」であり、第 2 位は「健康を損なう心配がない仕事」、第 3 位は「専門知識や技術が活かせる仕事」であったが、1 番目と 2 番目を質問しており、それを合計したデータの分析結果である。

本研究のために行った調査は 3 月 17 日～19 日の 3 日間で実施したが、3 月 18 日は東京の感染者数が初めて 200 人を超え、感染は拡大の傾向にあることが大きく報道されていた。緊急事態宣言の前ではあるが、日本経済新聞の 2 月 28 日 (2 月 28 日 0:49 更新) の新型コロナ対策についての企業調査によると、在宅勤務が 5 割だった時期でもあった。一人で行う在宅勤務では、人と接する機会が減少するなどコミュニケーション不足が発生するため、「仲間と楽しく働ける仕事」を理想とする割合が高くなった可能性がある。そして、世界的に感染拡大が始まった時期でもあったため、生

活者は日々変わる感染状況，不安に満ちた世の中において，まずは健康と安定を，という気持ちが強くなっているのではないと思われる。新型コロナウイルスの拡大が生活者の意識・行動の一時的な変化のみならず，働き方など，根本的な価値観の変化も引き起こしているしている可能性がある。

次に，これまでの調査研究で理想の仕事に影響すると指摘されてきた諸要因とこれまでの調査研究において人々理想とする生活意識に影響と言われている諸要因とのクロス集計分析とカイ 2 乗検定結果について述べる。

1) 性別

日本人の理想の仕事には，0.1% 以上の有意水準で男女差が認められた。「高い収入が得られる仕事」は男性の方が女性より高く，「仲間と楽しく働ける仕事」は女性の方が男性より高いことが分かった (図 3)。また，「世の中のためになる仕事」も男性の割合が，女性のその割合よりやや高い。男性が収入や仕事のやりがいを重視しているのに対し，女性は人とのつながりという職場環境を重視していることが伺える。

NHK が 2018 年に行った調査結果でも理想とする仕事に男女差があることが明らかにされており，「専門技術や知識が活かせる仕事」，「高い収入が得られる仕事」，「責任者として，采配が振るえる仕事」，「独立して人に気がねなくやれる仕事」などは男性の方が多く，「仲間と楽しく働ける仕事」，「健康を損なう心配がない仕事」，「働く時間が短い仕事」が女性の方が多くことが明らかにされている。内閣府が 2019 年 6

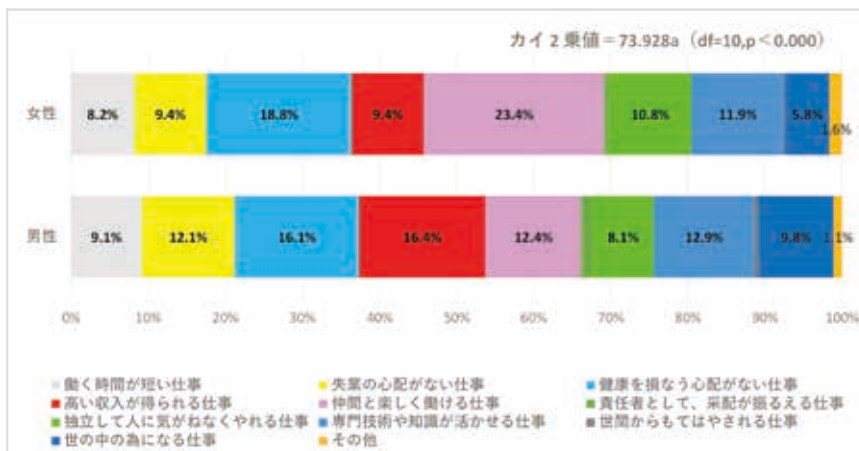


図 3 男女別の理想の仕事

月に行った調査結果では、「自分にとって楽しい仕事」や「私生活とバランスがとれる仕事」と答えた者の割合は女性の方が高く、「自分の専門知識や能力がいかせる仕事」を答えた者の割合は男性の方が高いことが明らかにされている。

しかし、今回行った調査研究では、「高い収入が得られる仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」以外の項目に明確な男女差が認められなかった。

今回の調査は、全国の20歳～69歳の男女を対象としているが、男性は公務員や正社員など正規雇用者として働いている者が79.3%あるのに対し、女性は正規雇用者として働いている者は30.8%であり、35.8%が専業主婦、23.7%がアルバイト・パートだった。このことを合わせて考えると、そもそも全体として正社員として働いている女性が少ない、男性に比べて「高い収入を得られる仕事」よりも、「仲間と楽しく働ける仕事」を理想とする仕事に上がってくるのは当然だと言える。

2) 地域別

「理想の仕事」には、有意水準10%でも居住地域による有意差が見られなかった。日本人の理想とする仕事には地域の影響が見られないということである。内閣府(2019)が行った調査では、「自分の専門知識や能力がいかせる仕事」を挙げた者の割合は大都市で高くなっているが、今回の調査では、地域による有意差がないという結果になった。今回の調査で地域による有意差がなかったのはWEB調査によるサンプルの偏りによる可能性を否定できないが、本調査研究の結果、統計的に地域による有意差があるとは言えないという結果であり、地域による差がないということではないことに留意しておきたい。

3) 年代別

「理想の仕事」には、0.1%以上の有意水準で年代による有意差が認められた(図4)。わずかであるが、年齢が高くなるほど、「健康を損なう心配がない仕事」、「専門技術や知識が活かせる仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」を理想の仕事とする割合が高くなっている。

そこで、20歳から45歳までを若者、45歳以上を中高年と再カテゴリー化し、再度クロス集計を行った結果、同じく0.1%以上の有意水準で有意差が認められた(図5)。若者の「働く時間が短い仕事」や「高い収入が得られる仕事」を理想とする割合は、中高年のその割合よりわずかに高いことが明らかにされた。また、中高年の「失業の心配がない仕事」、「人に気がねなくやれる仕事」、「専門技術や知識が活かせる仕事」を理想とする割合は若者のその割合より高いことが分かった。内閣府(2019)

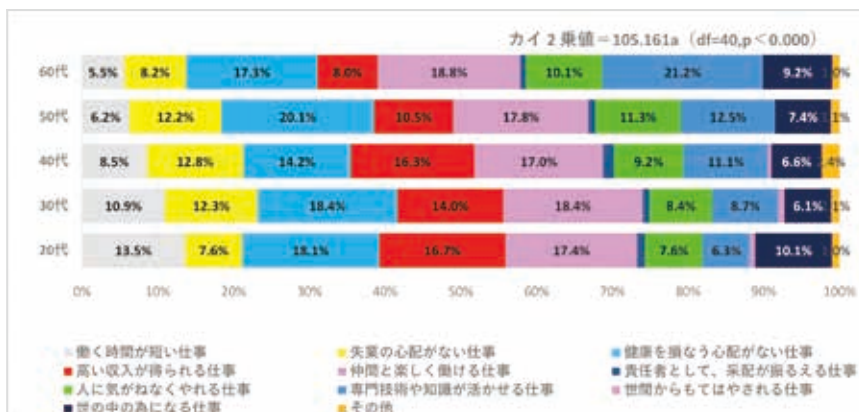


図 4 年代別の理想の仕事

の調査では「収入が安定している仕事」を理想とする者の割合は、50 歳代までの全年代で高く、「自分の専門知識や能力がいかせる仕事」を挙げた者の割合は 40 歳代、50 歳代で高いという結果が得られており、両調査に共通しているのは、年齢が高いほど専門性を重視する傾向が見られることである。世の中に多様な生き方があり、若い程お金があれば何でもできるだろうと思いがちの面があるが、45 歳を過ぎるとその時までさまざまなことを経験するので、お金がすべてではない、お金そのものよりも、何かに夢中になれること、人に気を遣わず自分が好きなことができることが幸せだということに気づく人が多いという社会現象を物語っているのではないと思われる。

4) 未婚結婚別

未婚結婚別に「理想の仕事」を比較した結果（図 5）、既婚者の「健康を損なう心配がない仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」、「専門技術や知識が活かせる仕事」の割合が高く、それ以外に関しては、未婚による有意差がないという結果が得られた（図 6）。結婚している人は、家族のことがあるので、健康を第一に考えるのは当然であろう。また、「仲間と楽しく働ける仕事」は精神的に安心できる、ストレスのない仕事ということで、家庭生活にとって基本的に重要な問題である。

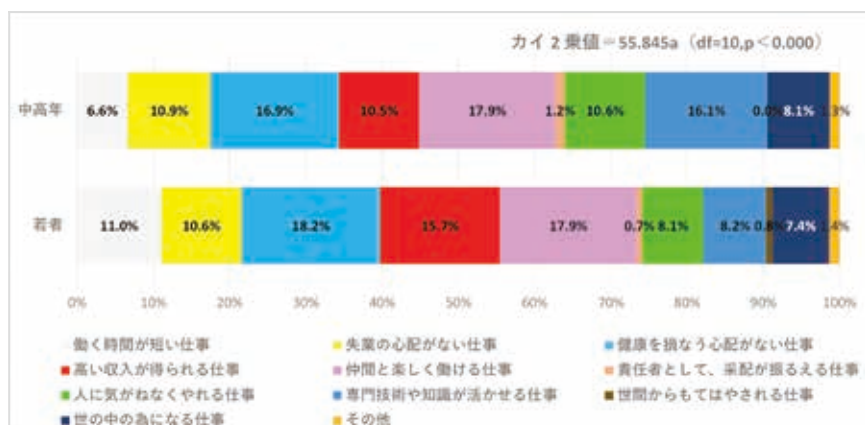


図 5 若者と中高年別の理想の仕事

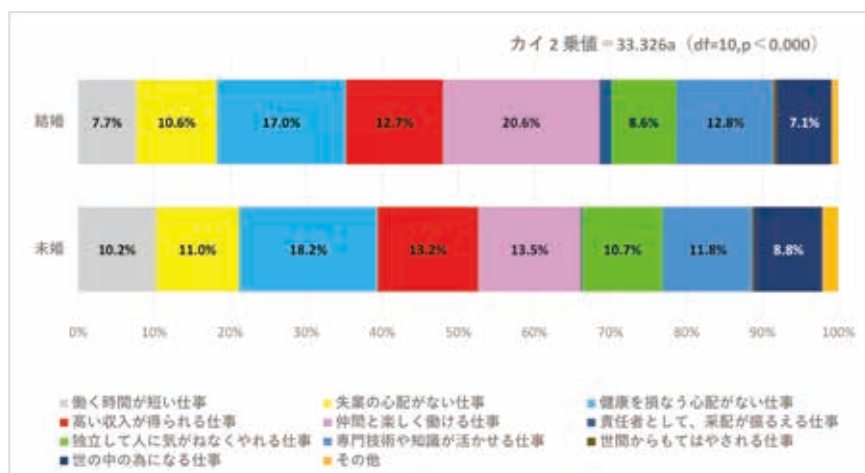


図 6 未婚結婚別の理想の仕事

5) 子供の有無別

日本人の理想の仕事に関しては、有意水準 0.1% で子供の有無による差異があることが認められた（図 7）。子供を持っている人の「健康を損なう心配がない仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」、「専門技術や知識が活かせる仕事」の割合が、子供がない人のその割合より、若干高くなっている。それらを 1 つずつ比較した場合は、その差はわずかであるように見えるが、0.1% 水準で有意差があることを合わせて考えると、子供の有無で理想とする仕事の傾向がはっきりしていると言える。「健康」を重視するのは、自分だけの問題ではなく、常に子供の世話などが念頭にあり、病気をしないよう日頃から気をつけているからであろう。

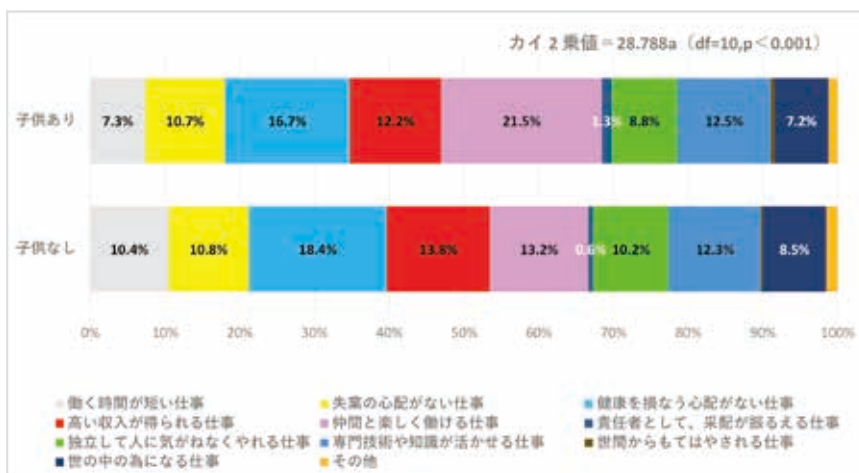


図 7 子供の有無別の理想の仕事

6) 学歴別

日本人の理想とする仕事に関しては、0.1% 以上の有意水準で学歴差が認められた（図 8）。学歴が高校以下（旧中・高女・師範・実業学校等）の人と短大・高専卒（旧高・高専・高師）の人が理想とする割合が最も高い仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であり、「大学以上」の学歴の人が最も理想とするのは「健康を損なう心配がない仕事」であり、他のどの学歴よりもその割合が高かった。「各種学校」の学歴が最も理想とするのは、「仲間と楽しく働ける仕事」であった。

「大学以上」の人たちが「専門技術など」で比率が高いのは常識的にうなずける傾向である。また、「健康」でも「大学以上」の比率が高いのは、心身共に健康でない

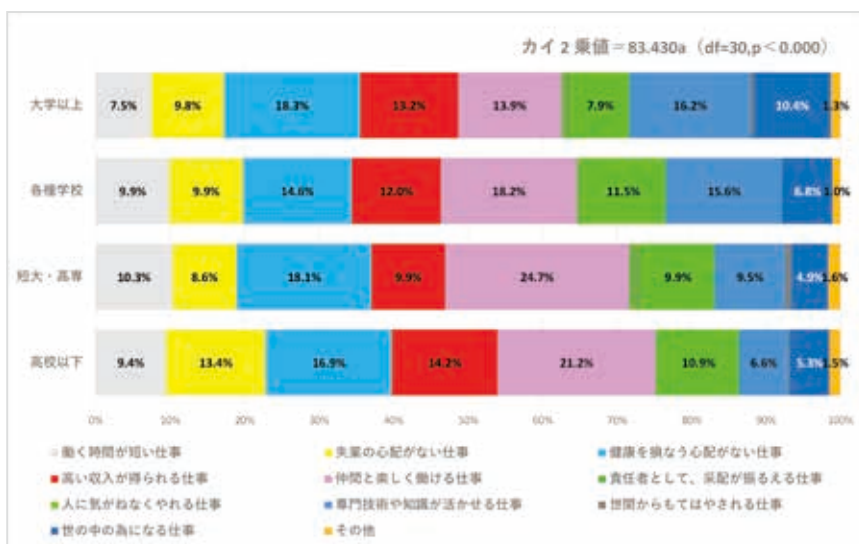


図 8 学歴別の理想の仕事

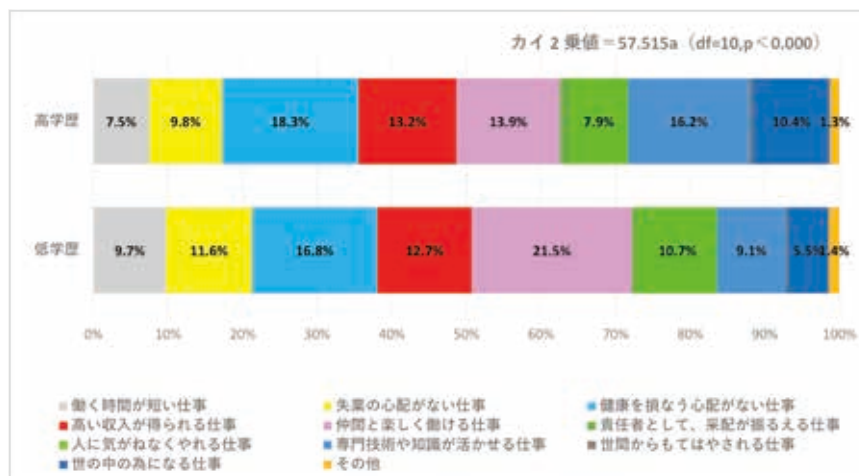


図 9 学歴別の理想の仕事

と職責を果たせないと自覚しているからと推定できる。

さらに、学歴が大学以上を高学歴、それ以外の人を低学歴と再カテゴリー化し、比較した結果（図 9）、低学歴の「仲間と楽しく働ける仕事」、「働く時間が短い仕事」、及び「失業の心配がない仕事」、「人に気がねなくやれる仕事」を理想とする割合が、それぞれ高学歴者のその割合より高く、高学歴者の「専門技術や知識が活かせる仕事」「世の中のためになる仕事」を理想とする割合が、低学歴者のその割合より高かった。

7) 職業別

職業別に理想とする仕事を比較した結果、0.1% 以上の有意水準で差があることが認められた（図 10）。会社員が理想とする仕事の第一は「高い収入が得られる仕事」であり、「健康を損なう心配がない仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」が続く。自営業の人が理想とする仕事の第 1 位は、「専門技術や知識が活かせる仕事」であり、専業主婦（主夫）が最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」で、「健康を損なう心配がない仕事」を理想とする割合が 2 番目に高かった。学生は「健康を損なう心

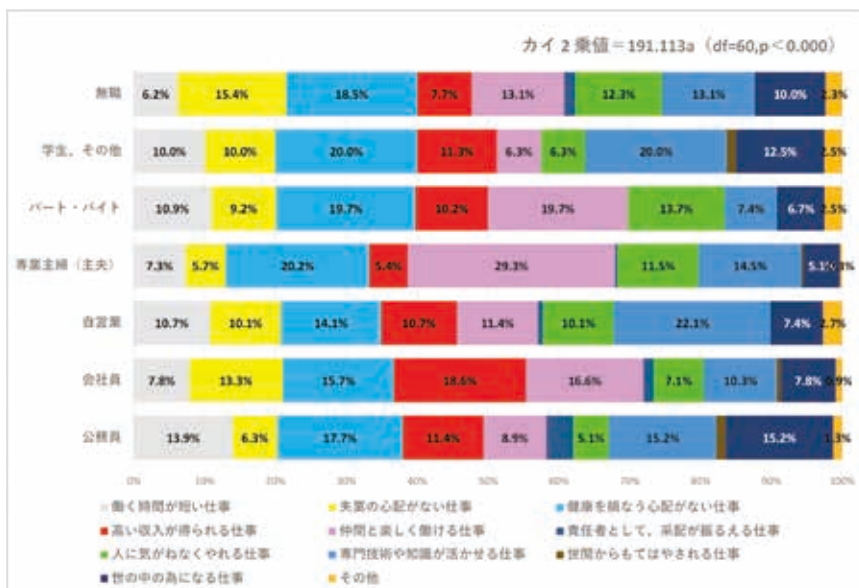


図 10 職業別理想の仕事

配がない仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」を理想とする割合が同じで、最も高い。無職の人の理想とする仕事の中で最も高いのは、「失業の心配がない仕事」と「健康を損なう心配がない仕事」であった。

いずれも常識的な結果といえよう。

8) 収入を伴う仕事経験別

収入を伴う仕事経験の有無別に理想とする仕事を比較した結果（図 11）、有意水準 0.1%以上の確率で収入を伴う仕事経験の有無による有意差があることが認められた。「以前働いたことはあるが、現在働いていない」人達が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」であった。これに対して、「現在働いている」人たちの最も理想とする仕事は「高い収入が得られる仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」、「健康を損なう心配がない仕事」であり、それぞれの割合はほぼ同じ程度だった。また、「これまで働いたことがない」と答えた人達が理想とする仕事は「失業の心配がない仕事」や「健康を損なう心配がない仕事」であった。ただしこれまで働いたことがない人たちのサンプル数は 53 で、他のカテゴリーに比べて

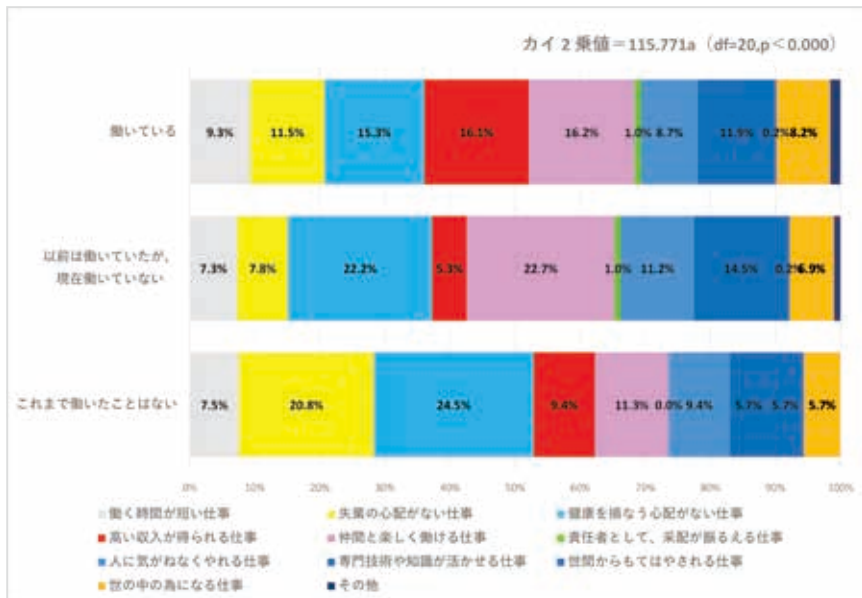


図 11 収入を伴う仕事経験有無別の理想の仕事

非常に少ないため、参考値であることに留意しておきたい。

9) 仕事での最高役職別

仕事での最高役職別に、日本人が理想とする仕事の比較を行った結果、有意水準 0.1% 以上の確率で仕事での最高役職による有意差があることが認められた (図 12)。仕事での最高役職が「部長クラス以上」の最も理想とする仕事は「高い収入が得られる仕事」と「専門技術や知識が活かせる仕事」であり、次に「世の中の為になる仕事」、「失業の心配がない仕事」、「働く時間が短い仕事」などが続いた。仕事での最高役職が「課長・主任クラス」の人たちが最も理想とする仕事は、「高い収入が得られる仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」と「専門技術や知識が活かせる仕事」であり、その次に「世の中の為になる仕事」が続いた。仕事での最高役職が「係長クラス」の人たちが理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「高い収入が得られる仕事」、及び「仲間と楽しく働ける仕事」であった。仕事での最高役職が「一般社員」の人たちが理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」であった。仕事での最高役職が「その他」の人たちが理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」、及び「専門技術や知識が活かせる仕事」であった。

仕事での最高役職が係長クラス」の人たちや「一般社員」、「その他」の人たちが理

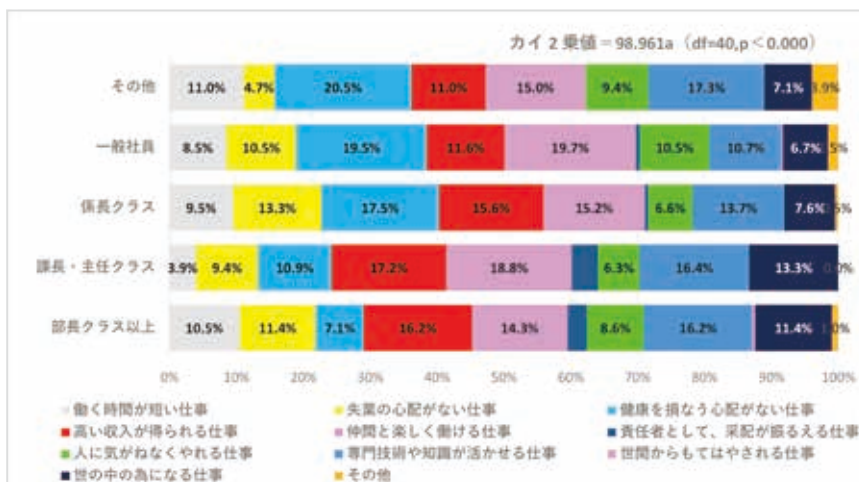


図 12 仕事での最高役職別の理想の仕事

想とする仕事の第1位は「健康を損なう心配がない仕事」であるのに対して、「部長クラス以上」と「課長・主任クラス」の人たちの場合は、第3位となっていることに注目したい。仕事での最高役職が「部長クラス以上」と「課長・主任クラス」の人たちにおいては、世の中のためになる仕事を理想とする優先順位が他より高い傾向を合わせて考えると、仕事などで昇進するほど、世の中のために役立とうとする傾向が強まり、その結果として、「健康を損なう心配がない仕事」であるかどうかの優先順位が低くなっているのではないと思われる。日本人上司ならではの傾向ともいえるだろう。

10) 年収別

年収別に理想とする仕事を比較した結果、有意水準0.1%以上の確率で収入を伴う仕事経験の有無による有意差があることが認められた（図13）。年収が「200万未満」、「200～399万」の人たちが最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」であった。年収が「400～799万円」、「800～999万円」の人たちが最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」はであった。年収が「1000万円以上」の人たちが最も理想とする仕事は、「高い収入が得られる仕事」であった。

年収が高くなるほど「高い収入が得られる仕事」と理想とする割合が高いだけではなく、「責任者として、采配が振るえる仕事」を理想とする割合も高く、年収が低くなるほど「働く時間が短い仕事」を理想とする割合と「人に気がねなくやれる仕事」を理想とする割合が高い。

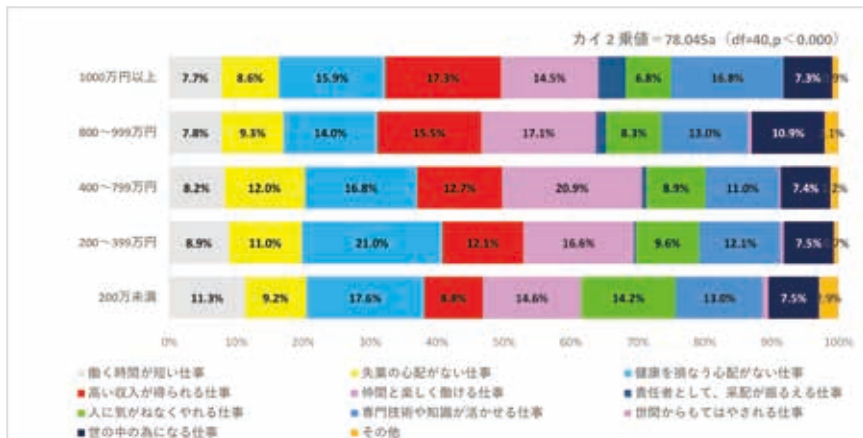


図13 年収別の理想の仕事

11) 1ヶ月の支出別

1ヶ月の支出別に、日本人が理想とする仕事の比較を行った結果、有意水準4%の確率で有意差があることが認められた（図14）。1ヶ月の支出が「10万未満」と答えた人たちと「10～20万未満」と答えた人たちが最も理想とする仕事の第1位は「健康を損なう心配がない仕事」であった。1ヶ月の支出が「20～30万未満」と答えた人たちと「30～40万未満」と答えた人たちが最も理想とする仕事の第1位は「仲間と楽しく働ける仕事」であった。1ヶ月の支出が「40万以上」と答えた人たちが最も理想とする仕事は「高い収入が得られる仕事」であり、また「専門技術や知識が活かせる仕事」を理想とする割合も他より高く、「失業の心配がない仕事」を理想とする割合は他より低かった。

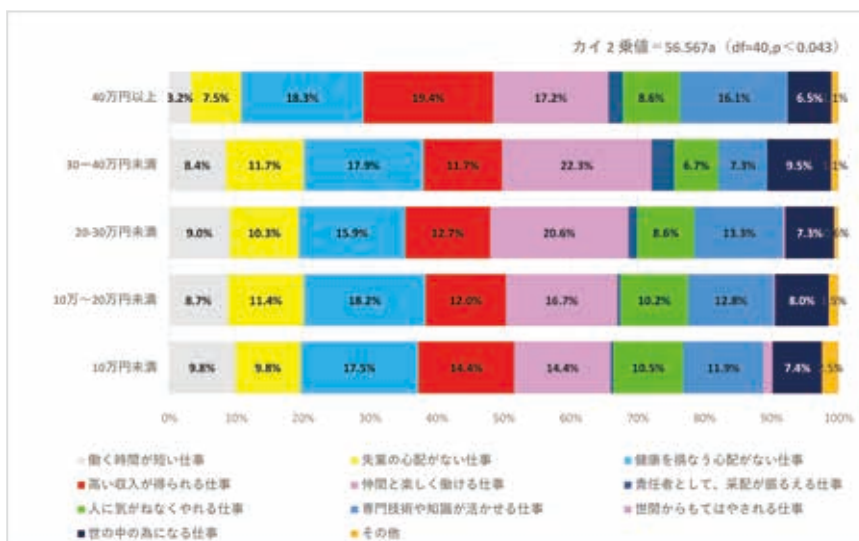


図14 1ヶ月の支出別の理想の仕事

これらの結果は、なかなか興味深い。低収入層は「仲間と楽しく働ける仕事」が第1位で、現状肯定かあきらめか、いずれにしろ、楽しく仕事しようという雰囲気であるのに対して、中間層はさらに高収入を望み、また高収入層は失業の心配はなく、技術や知識を生かすことに働きがいを見出すという現実に即した結果であると思われる。

12) 経済的ゆとり感別

日本人の理想とする仕事に関しては、有意水準0.1%以上の確率で経済的ゆとり感による差が認められた（図15）。経済的ゆとり感が「ある」と答えた人たちの最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」や「健康を損なう心配がない仕事」、及び「専門技術や知識が活かせる仕事」であり、経済的ゆとり感が「あるともないともいえない」と答えた人達が最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であった。経済的ゆとり感が「ない」と答えた人の最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」であった。

大きな差ではないが、経済的ゆとりがないほど、「人に気がねなくやれる仕事」を理想とする割合高いという興味深い結果が得られた。また、経済的ゆとりがあるほど、「専門技術や知識が活かせる仕事」を理想とする傾向が強い。

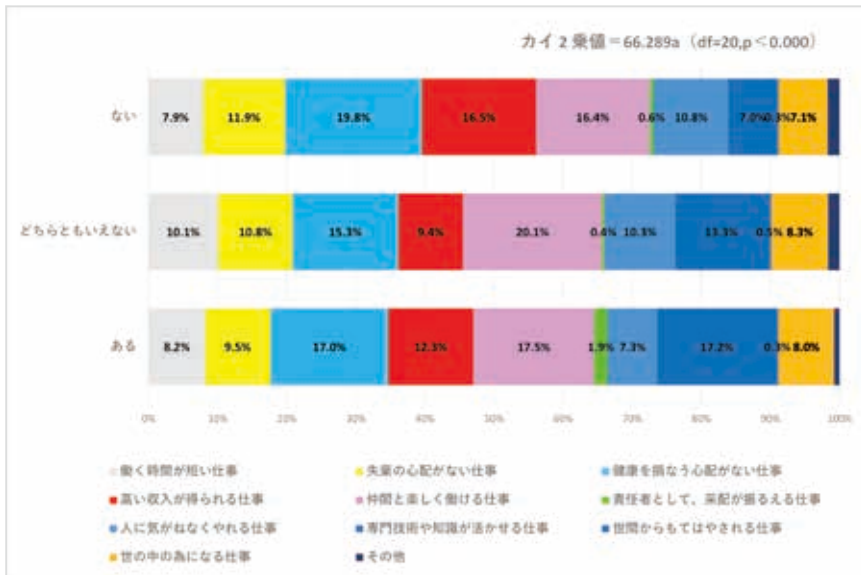


図15 経済的ゆとり感別の理想の仕事

13) 健康状態別

健康状態別に、日本人が理想とする仕事の比較を行った結果、有意水準0.2%の確率で有意差があることが認められた（図16）。健康状態が「とても良い」人たちが理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であり、「健康を損なう心配がない仕事」

事」と「高い収入が得られる仕事」が続く。健康状態が「良い」人たちが最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」と「健康を損なう心配がない仕事」であり、「専門技術や知識が活かせる仕事」が続いている。健康状態が「あまりよくない」と答えた人たちが理想とする仕事の中で最も高いのは、「健康を損なう心配がない仕事」、「仲間と楽しく働ける仕事」、「人に気がねなくやれる仕事」などであるが、わずかの差である。健康状態が「良くない」と答えた人たちが理想とする仕事の中で割合が最も高いのは「健康を損なう心配がない仕事」と「失業の心配がない仕事」である。

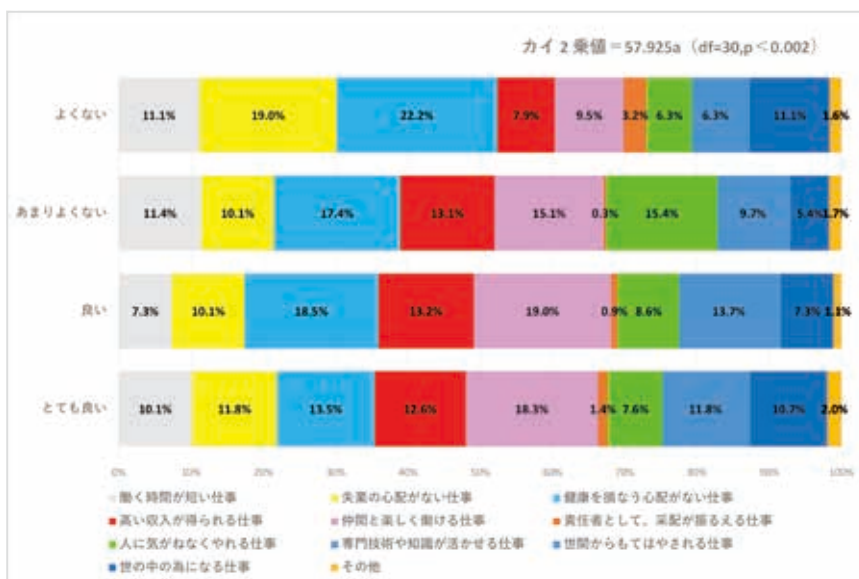


図16 健康状態別の理想の仕事

14) 自由時間と自由時間ゆとり感による差異

日本人の理想とする仕事に関しては、有意水準1%の確率で自由時間の多少による有意差が認められた（図17）。自由時間が「2時間以内」と答えた人たちの最も理想とする仕事は、「仲間と楽しく働ける仕事」であり、自由時間が「4時間以内」が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」であり、自由時間が「6時間以内」と答えた人たちの最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」、自由時間が「7時間以上」と答えた人たちの最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」であった。自由時間が「2時間以内」と答えた

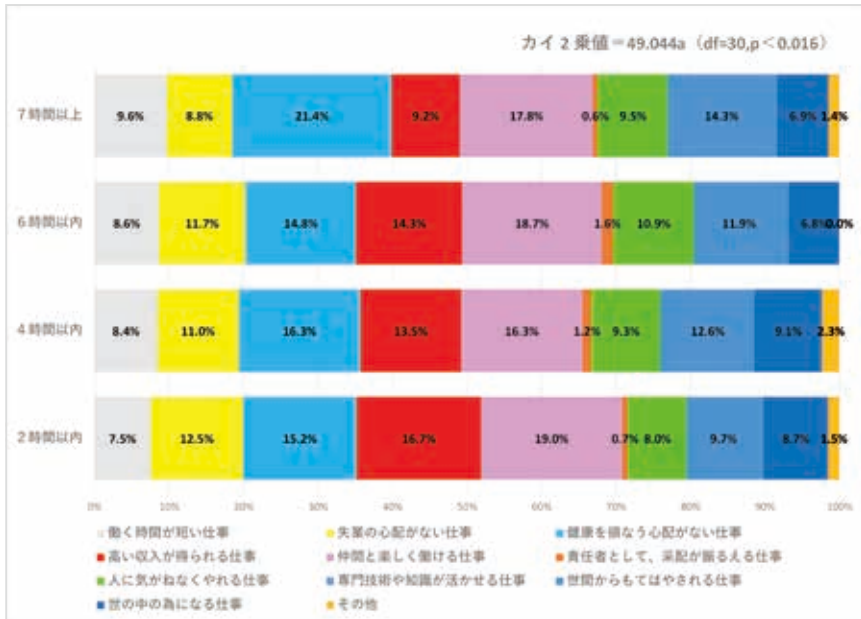


図 17 自由時間別の理想の仕事

人たちが「高い収入が得られる仕事」とする割合が、その他より高く、自由時間が少ないほど、「世の中の為になる仕事」を理想とする割合が高かった。また、自由時間が多いほど、「働く時間が短い仕事」、「人に気がねなくやれる仕事」と「専門技術や知識が活かせる仕事」などを理想とする割合が高くなっている。

上記のように、理想とする仕事には、自由時間による有意差があることが明らかにされたが、現実生活には、自由時間がいくらあっても足りないとする人もいれば、1時間あれば十分とする人もいる。そこで、自由時間に対するゆとり感による有意差があるかどうかを確認するために、クロス集計とカイ2乗検定を行った。その結果、日本人の理想とする仕事に関しては、有意水準0.2%の確率で自由時間のゆとり感による有意差あり、自由時間ゆとり感がないほど、「高い収入が得られる仕事」を理想とする割合が高いことが分かった（図18）。それぞれ細かくみていくと、自由時間ゆとり感が「たくさんある」と答えた人達が最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であり、「少しある」と答えた人達が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」であり、自由時間が「あまりない」と答えた人達が最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であった。また、自

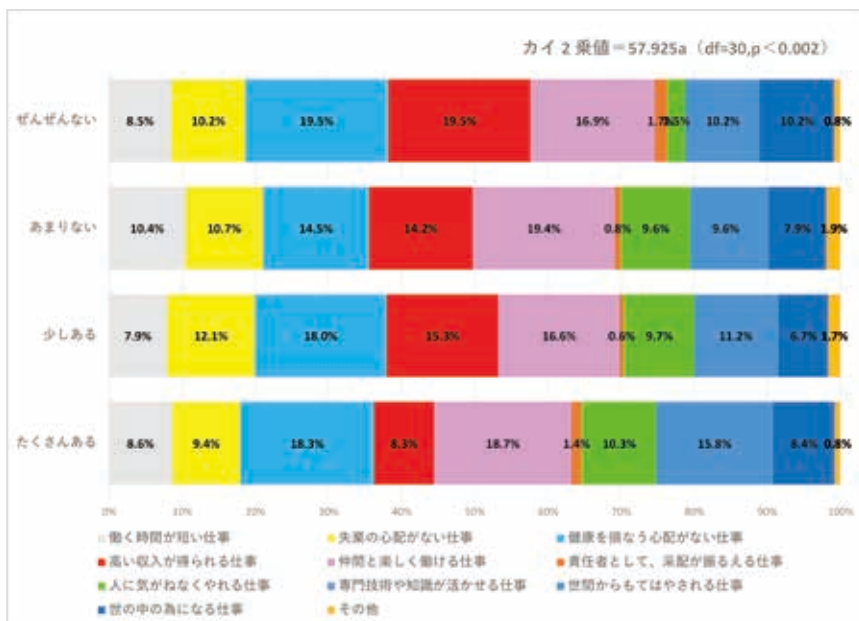


図18 自由時間ゆとり感別の理想の仕事

由時間が「ぜんぜんない」と答えた人達が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「高い収入が得られる仕事」第1位と第2位の差がほとんどなく、しかもその割合はほかより高かった。

15) 自由時間を誰と一緒に過ごすか

日本人の理想とする仕事に関しては、有意水準0.6%の確率で自由時間を誰と過ごすかによる有意差が認められた（図19）。自由時間を「一人で過ごす」と答えた人たちの最も理想とする仕事は、「健康を損なう心配がない仕事」であり、自由時間を「誰かと一緒に過ごす」と答えた人たちの最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であった。自由時間を「一人で過ごす」と答えた人たちの「独立して人に気がねなくやれる仕事」と「専門技術や知識が活かせる仕事」を理想とする割合が、自由時間を「誰かと一緒に過ごす」と答えた人たちのその割合の2倍になっていることは注目する価値があると思われる。「独立して人に気がねなくやれる仕事」と「専門技術や知識が活かせる仕事」を理想とする人たちは、自由時間も一人で誰にも気がねせず過ごしたいという欲求が強いという傾向があるといえる。

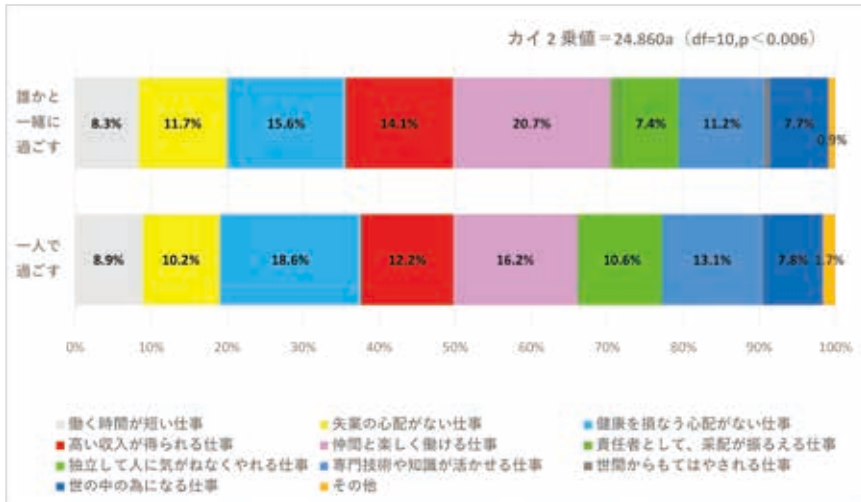


図 19 自由時間を誰と一緒に過ごすか別の理想の仕事

16) 現在の仕事や役割への満足感と理想とする仕事

「理想の仕事」には、有意水準 10%でも現在の仕事への満足感による差が見られなかった。一般的に、「現在の仕事への満足感」の理想とする仕事への影響が大きいと思われがちであるが、今回実施した日本全国の日本人を対象とする WEB 調査では、理想とする仕事に「現在の仕事への満足感」による有意差がないという興味深い結果が得られた。これは、本研究の調査が WEB 調査であることによるのかもしれない。WEB 調査だけではなく、郵送調査やアンケート配布調査の実施と分析を今後の課題としたい。

上記のように、今回 20 歳から 69 歳までの日本人を対象とする調査研究を行った結果、理想とする仕事には、性別、年代、結婚や子供の有無、学歴、職業、収入を伴う仕事経験の有無、最終役職、年収、1 ヶ月の支出、経済的ゆとり感、健康状態、自由時間や自由時間の過ごし方等による有意差があることが認められ、この点に関しては、日本や中国などで行われた理想する仕事に関する調査と同じ傾向を示している結果もあれば、異なる場合もある。そして、本研究によって、収入を伴う仕事経験の有無、最終役職、年収、1 ヶ月の支出、経済的ゆとり感、健康状態、自由時間や自由時間の過ごし方等による理想する仕事異なることが明らかにされており、この点は、これまでの調査研究で明らかにされていない新しい知見であると言える。

しかし、上記のデータから明らかになったのは、理想とする仕事における諸要因による有意差だけであり、それらの要因が理想とする仕事にどのように影響を与えているかはわからない。上記の諸要因が、理想とする仕事にどのように影響しているのかを明らかにするためには、更なる分析と検討が必要である。以下において、これらの要因の理想とする仕事への影響を検討するために回帰分析を行う。

(2) 理想とする仕事を規定する要因－従来研究との比較を中心に

上記 (1) で取り上げた諸要因が「理想の仕事」に与える影響について検討するために、カテゴリカル回帰分析を行った。**表 3** は投入する F の確率を 0.05% 以下、除去する F の確率を 0.1 以上として行ったカテゴリカル回帰分析の結果であり、地域、年齢、学歴、職業、収入伴う仕事経験、経済的ゆとり感などが理想とする仕事を規定する要因であることが明らかになった (**表 3**)。

各変数の標準化回帰係数に注目してみると、「年齢」の標準化偏回帰係数が最も高く、理想とする仕事への影響が最も大きい要因であった。「地域」と「経済的ゆとり感」の標準化偏回帰係数を見てもその値が非常に低く、その影響は少ない。「性別」、「結婚の有無」、「子供の有無」、「通学年数」、「最終役職」、「年収」、「1ヶ月の支出」、「健康状態」、「自由時間の多少」、「自由時間ゆとり感」、「自由時間を誰とするか」、「現在の仕事や役割への満足感」等が理想とする仕事に有意な影響を与えていない(明確な正負の関係が認められなかった)。

これまでの調査研究では、自由時間や自由時間の過ごし方の理想とする仕事への影響が大きいことが指摘されていたが、今回の調査研究では、自由時間が「理想の仕事」に影響するが、自由時間のゆとり感や自由時間の過ごし方は「理想の仕事」に影響しないという結果が得られた。

日本人の「理想の仕事」に関する意識が日本人のライフスタイルにどのような影響を与えているか、またその理想とする仕事がライフスタイルに影響するかどうかを明らかにするために上記の諸要因にさらにライフスタイル変数を加えて、カテゴリカル回帰分析を行い、それぞれの影響について検討し、「理想とする仕事」とライフスタイルの相互影響の大きさを人口学的・社会的属性との比較から明らかにした。以下では、その詳細を述べる。

表3 理想とする仕事に影響する要因の回帰分析モデルⅠ

変 数 名	β	DF	P	許容度
性別	0.028	1.000	0.355	0.717
地域	0.061	7.000	0.000	0.994
未婚既婚	0.034	1.000	0.256	0.489
子供の有無	0.034	1.000	0.229	0.550
年齢（年代刻み）	0.194	4.000	0.000	0.700
通学年数	0.059	1.000	0.507	0.645
学歴	0.115	3.000	0.065	0.596
職業	0.116	6.000	0.000	0.947
収入を伴う仕事経験	0.096	1.000	0.046	0.705
最終役職	0.101	4.000	0.308	0.757
年収	-0.032	3.000	0.912	0.658
一ヶ月の支出	-0.047	2.000	0.397	0.832
経済的ゆとり感	-0.095	2.000	0.013	0.782
健康状態	-0.022	2.000	0.773	0.849
自由時間	-0.008	1.000	0.880	0.783
自由時間ゆとり感	-0.021	3.000	0.901	0.705
自由時間を誰と過ごすか	0.037	1.000	0.138	0.864
現在の仕事や役割への満足感	-0.035	2.000	0.668	0.850
F値	4.639			
多重R2乗	0.327			
調整済みR2乗	0.084			

注： β は標準化係数、DFは自由度、Pは有意確率

(3) ライフスタイルの類型と「理想とする仕事」

1) ライフスタイルの類型

ライフスタイル類型については、まず、生活行動に関する44項目と生活態度（社会観）に関する38項目について主成分分析を行い、測定尺度の作成を試みた。その結果生活行動項目は11類型に集約され（表4）、生活態度に関する38項目が9類型に集約された（表5）。

一般的に、サンプルの規模が1,000を超すほど大きいときには、カイ2乗値をモデルの適合度指標として採用することは適切ではない（シャザディグリ、2020）とされてい

表 4 日本人の生活態度の類型

因子名	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	平均値	標準 誤差	共通性
諦 観	手直し程度では社会問題は解決しない	0.682									3.075	0.741	0.540
	政治家は社会問題に本気ではない	0.635									3.015	0.804	0.528
	日本では国民の意見が正しく反映されていない	0.587							0.329		2.898	0.766	0.499
	競争に追い立てられるよりは、気のまま生きるのが幸せ	0.533									2.979	0.719	0.465
	私たちが少々頑張ったところで政治はよくなる	0.469	0.446								2.913	0.783	0.464
	高望（たかのぞ）をしない	0.445				0.310					2.885	0.747	0.465
逃 避	現代を生き抜いていくためには、他人のことをかまっていられない		0.619								2.547	0.733	0.500
	世の中は自分の思い通りにならないから。諦めた方が賢い		0.594								2.520	0.748	0.469
	社会活動は熱心な人に任せておけばよい		0.577								2.580	0.737	0.453
	世の中の動きは、自分の生活には関係ない		0.546								2.113	0.713	0.538
	親しい関係と言っても、いざとなったら信頼できない		0.474		0.302						2.667	0.731	0.421
	日本はどうだろうと自分の生活には関係がないことだ	-0.317	0.462					0.349		0.321	1.984	0.763	0.577
伝 統 的 権 威 主 義	青少年になによりも必要なのは、親の厳しいしつけだ			0.621							2.440	0.771	0.442
	今の時代でも、やはり家柄や家格は大切にすべきである			0.567							2.448	0.813	0.380
	なんだかんだと言っても、成人した子どもには、年をとった親の世話をする義務がある			0.549							2.465	0.777	0.424
	昔からあるしきたりや習慣は今日でも大切にすべき			0.489							2.713	0.734	0.467
	今の世の中は義理人情がすたれて暮らしにくくなった			0.415					-0.328		2.675	0.737	0.458
	出世や成功したひとたちは、多かれ少なかれあくどいことをしてきたに違いない		0.307	0.331							2.529	0.782	0.385
遠 慮 型	子供の世話や親の介護が必要になった場合、お金を払って誰かに世話をしてもらおうほうがよい				0.741						2.768	0.773	0.579
	高齢者にとって、子供に世話になるより、公的サービスを利用したほうが、気が楽だ				0.728						2.928	0.746	0.592
	一般的に言って、親が結婚した子供と同居した場合あまりうまくいかない				0.540						2.827	0.767	0.385
	自分の考えにあわない点があっても、皆の意見に合わせて音便にことを運びたい				0.576						2.686	0.684	0.437
同 調	何かを決めるときは従来のやり方に従っておくのが無難				0.575						2.562	0.681	0.478
	周りに反対されても自分の信念をすためく					-0.536		0.336			2.510	0.716	0.535
	自分と同じ年代の人がしていることと同じことをしていれば安心				0.510						2.298	0.721	0.510
	目上の人には、従うべきである			0.395		0.491					2.455	0.701	0.463
愛 着 元	いま住んでいるところが気に入っている						0.869				2.796	0.813	0.780
	いま住んでいるところに愛着がある						0.852				2.731	0.831	0.771
楽 観	今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹く							0.682			2.517	0.783	0.508
	家族が大切にしてくれば、ほかに何もなくても幸せだ							0.523			2.645	0.781	0.413
	今住んでいる地域ではよそ者という言葉が生きている			0.304			-0.356	0.417			2.142	0.815	0.468
	子どもにとって今の世の中で成長することは幸せだ			0.329				0.347		-0.309	2.495	0.770	0.439
現 状 肯 定 型	昔に比べて今の時代は高齢者にとって生活しやすい								0.762		2.599	0.781	0.602
	外国に比べて、日本では高齢者が大事にされている								0.648		2.581	0.732	0.495
	ホームヘルパーとか食事の配達などの福祉サービスが十分に行われていれば、高齢者は不自由なくやっていける				0.376				0.445		2.596	0.755	0.473
反 日	日本に魅力を感じない									0.739	2.115	0.738	0.613
	なんだかんだと言っても、今の日本はよい社会だ									-0.629	2.735	0.742	0.571

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うエカマックス法 a. 14 回の反復で回転が収束しました。

表5 日本人の生活行動の類型

因子名	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	平均値	標準 誤差	共通性
トレンド型	実用性よりもファッションを選ぶ	0.636											2.096	0.762	0.559
	流行を追求する	0.618											1.905	0.761	0.559
	周りの人が持っていないようなものや新しいものを身につけるのが好き	0.536											2.182	0.840	0.414
	誰よりも早く新しい商品やサービスを買う	0.530	0.329										1.919	0.780	0.570
	新商品やサービスを常にチェックしている	0.456			0.347		0.321						2.187	0.810	0.709
	ネット広告をよく見る	0.343					0.318						2.170	0.818	0.641
	日本以外の国や地域のライフスタイルに憧れている	0.330											2.123	0.871	0.571
チャレンジ型	仕事に生きがい求めて、全力を傾ける		0.696										2.090	0.793	0.625
	思い切って挑戦する		0.574										2.278	0.748	0.472
	知らない人にも自分から話かけようとしている		0.527										2.085	0.824	0.525
	仕事よりも余暇に生きがいを求めている		-0.526		0.335								2.854	0.779	0.474
	自分の将来（業績）に大きな期待を寄せている		0.479			0.308							2.060	0.805	0.596
	自分の考え方や主張を積極的に発信するようにしている	0.301	0.459										2.145	0.804	0.566
社会参加重視型	新聞や雑誌をよく読む				0.677								2.187	0.917	0.541
	環境に関する活動やイベントに参加している		0.306	0.545									1.786	0.801	0.511
	できるだけ地域の祭り・イベントに参加するようにしている			0.496						0.311			2.007	0.847	0.558
	障害者支援、高齢者支援等の福祉活動に参加している	0.330	0.310	0.486									1.710	0.842	0.584
情報取捨選択型	通常、商品を買う前・サービスを利用する前に色々よく調べる				0.667								2.848	0.791	0.673
	知りたいことによって、様々な情報源を使い分けている				0.660								2.650	0.751	0.485
	気になったものはすぐにインターネットや携帯で検索する				0.571				0.339				3.094	0.786	0.541
	世の中の情報は鵜呑みにしないで、自分なりに評価し・判断するようにしている				0.562								2.849	0.721	0.483
ボーリッツ志向型	ジョギングや筋力トレーニングをしている					0.766							2.049	0.972	0.491
	散歩や軽い体操をするように心がけている					0.697							2.539	0.906	0.653
	テニスや野球、サッカーなどの球技をしている			0.338		0.373							1.661	0.906	0.532
テレビ依存型	テレビCMをよく見る						0.801						2.344	0.909	0.488
	テレビをよく見る						0.772						2.745	0.945	0.634
	CM、広告などでよく見かけたものを買う	0.451					0.489						2.034	0.752	0.583
気まぐれ型	時々衝動のために必要ではないものを買ってしまう						0.711						2.486	0.817	0.538
	衝動的に（突然）何かをすることが多い						0.661						2.253	0.791	0.529
	お金を使う時はとても用心深い						-0.477				0.431		2.702	0.753	0.649
	いつも物事を計画的に行う				0.365			-0.370		0.317	0.311		2.580	0.758	0.559
ロハス型	買い物するときはマイバッグを持参する							0.675					2.879	0.932	0.611
	エアコンの設定温度を控えめにしている							0.624					2.787	0.845	0.516
	健康のために規則正しい生活を心がけている					0.398		0.491					2.637	0.792	0.628
	毎日健康や美容により食事をしている					0.414		0.424					2.401	0.795	0.569
慎重型	多くの時間を家族と一緒に過ごしている									0.623			2.639	0.895	0.413
	相手のことを第一に考えて行動するようにしている									0.473			2.591	0.716	0.516
	株はリスクが高すぎるから、買わないようにしている								0.344	0.457			2.881	0.993	0.437
ドライな行動型	何かが壊れた場合修理するのではなく、交換する										0.622		2.391	0.748	0.500
	面白くない仕事でも生活のためには、我慢する										0.500		2.752	0.720	0.595
	どれだけお金を稼いだかが、成功を測る尺度だと考えている										0.486		2.344	0.792	0.471
	将来に備えて貯金している										0.464		2.511	0.873	0.491
倏約型	いつも安いものを買う											0.774	2.714	0.778	0.573

因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うエカマックス法、a. 35 回の反復で回転が収束しました。

る。モデルを検討するときによく用いられているのは共分散構造分析と信頼性分析であるが、共分散構造分析で得られる RMR (残差平方平均平方根), GFI (Goodness-of-Fit Index), AGFI (調整済み GFI), NFI (基準化適合度指標), RMSEA (平均 2 乗誤差平方根) からモデルの適合度を判定する場合もあれば、信頼性係数を算出して検討する場合もある。また、モデルの適合度が良好であっても、モデルを構成している項目を用いて作成される尺度の信頼性係数 α が高いというわけではないし、 α 値が大きければモデルの適合度も高くなるというわけではない。モデルの適合度と尺度の信頼性のいずれを優先するかは機械的に決められるものではなくて目的に応じて異なる。そこで、以上のようなことを念頭において、本研究では共分散構造分析を行った (表 6)。

共分散構造分析は、モデルの良否をモデル (推定された共分散構造) と観測データ (標本分散行列) との乖離 (適合) の程度 (乖離度 / 適合度) で判定する統計解析の方法である (狩野, 1997; Arbuckle and Wothke, 1999; 豊田, 2007)。これまでに、モデルの適合度を評価するための統計的指標 (適合度指標 goodness of fit index) が複数提案、開発されてきたが、それぞれの指標は何をもってそのモデルが適合しているかという考え方に少しずつ違いがあり、ある指標で良い適合とされても別の指標では適合が悪いと判断されることもある。基本的には、いくつかの代表的な指標について全て良い適合を示すモデルを報告することが求められる。本研究では、カイ 2 乗による検定、残差平方平均平方根 (RMR: Root Mean Square Residual), 平均 2 乗誤差平方根 (RMSRA: Root Mean Square Error of Approximation), 決定係数 (GFI: Goodness-of-Fit Index), 及び自由度調整済みの GFI (AGFI: Ajusted Goodness-of-Fit Index), 赤池情報量基準 (AIC: Akaike's Information Criterion), 基準化適合度指標 NFI (Normal Fit index) や CFI (Comparative Fit Index) などを掲載する。

カイ 2 乗検定は有意水準を表す P 値が 0.05 や 0.1 を超えて、その値が大きい程、モデルが標本データに近い、すなわち適合度が高いことになる。但し、標本数が 1000 を超えるような大標本を用いた分析においては、カイ 2 乗検定では、モデルが棄却される結果が生じることが知られている (狩野, 1997; Arbuckle and Wothke, 1999; 豊田, 2011)。その場合には、カイ 2 乗検定ではなく、GFI や RMSRA を適合度の指標にすることが提案されている (狩野, 1997)。GFI や NFI は 1 に近いほど、適合度が高いことを表す。CFI も NFI も GFI も 1 は完全な適合を示すが、最近では 0.9 以上が望ましいとされている。RMR が小さければ小さいほど適合度は高くなる。RMR が 0 の場合は、完全な適合度を示す。AIC (赤池情報量基準) はマイナス方向も含め、値が小さいほど良いモデルであると考え (Akaike, 1973&1978; Arbuckle, 2019)。そして、RMSEA の値が約 0.05 以下であれば、自由度に関してモデルの高い適合性を示しているが、RMSEA が約 0.08 以下の値は妥当な近似誤差を示すものであると考え、RMSEA が 0.1

を超えるモデルは採用しない (Browne & Cudeck, 1993)。本研究では、社会学領域における調査研究でよく使われている基準に従い (狩野, 1997; Arbuckle and Wothke, 1999), CFI, NFI, GFI, AIC などとも参考にすが, RMR は 0.05 以下, RMSEA が 0.08 以下であれば, モデルを受容してよいと判断する。

表 6 生活行動と生活態度の 1 因子モデルの適合度検定

適合度指標 モデル		CMIN	DF	P	RMR	GFI	AGFI	NFI	CFI	AIC	RMSEA
生活行動主成分モデル	トレンド	144.405	14	0.000	0.022	0.977	0.954	0.956	0.96	172.405	0.071
	チャレンジャー型	92.748	9	0.000	0.023	0.984	0.962	0.954	0.958	116.748	0.071
	社会参加重視型	346.153	5	0.000	0.042	0.998	0.988	0.994	0.995	24.58	0.042
	情報取捨選択型	30.236	2	0.000	0.016	0.992	0.958	0.969	0.971	46.236	0.088
	気まぐれ型	206.375	2	0.000	0.056	0.949	0.743	0.66	0.66	222.375	0.236
	ロハス	100.743	2	0.000	0.047	0.949	0.743	0.883	0.883	116.743	0.164
	ドライな行動	2.883	2	0.237	0.007	0.999	0.996	0.987	0.996	18.883	0.016
生活態度主成分モデル	諦観	121.149	9	0.000	0.026	0.977	0.947	0.926	0.93	145.149	0.082
	逃避	387.127	20	0.000	0.036	0.034	0.948	0.907	0.835	419.127	0.1
	伝統的権威主義	87.619	9	0.000	0.023	0.984	0.962	0.905	0.914	111.619	0.069
	同調	8.276	5	0.142	0.013	0.993	0.983	0.957	0.966	63.531	0.043
	楽観	8.646	2	0.013	0.012	0.998	0.988	0.96	0.969	24.646	0.043

なお、共分散構造分析では、2 項目からなる 1 因子モデルは、観測変数が 2 つなので、推定されるパラメータの数 (4) が標本積率の数 (3) を超えてしまい、自由度 (3-4) が -1 という負値となってモデルが識別されなくなる (1 項目の場合もモデルが識別されなくなる)。また、3 項目からなる 1 因子モデルでは、観測変数は 3 つなので、独立な標本積率の数の値は $3(3+1)/2=6$ となり、独立な推定パラメータの数は、1 つの独立変数、3 つの誤差変数、固定されていない 2 本のパスで、計 6 になり、標本積率の数 (6) と推定されるパラメータの数 (6) が同数になって、自由度 (6-6) がゼロの飽和モデルになるから、適合度の判定ができなくなる (適合度検定をする必要がなくなる)。そのため、表 6 には、1 項目、2 項目或いは 3 項目からなる 1 因子モデルを掲載していない。

各モデルの適合度判定諸指標が示すように、「気まぐれ型」と「ロハス型」、「逃避型」が改善余地はあったが、それ以外の各モデルの適合度が高く、良好なモデルであった。「気まぐれ型」と「ロハス型」、「逃避型」に関しては、それぞれ 2 因子モデル

ルからなるモデルの適合度検定を行った結果、受容されてもよいモデルであった（詳細は省略する）ため、全て受容されてよいモデルであると判断した。そこで、本研究では、以上取り上げたような生活行動と生活態度に関する 20 の主成分を、ライフスタイルセグメントを構成する尺度として検討を行い、それらの尺度を、ライフスタイルを分析・検討する際の構成要素とした。

上記の方法で抽出された生活行動に関する 11 類型と生活態度に関する 9 類型を用いてライフスタイルを類型化する際に、各類型の得点を平均 0、分散 1 になるように標準化し、それらを用いてクラスター分析を行った。有効回答票が 1800 を超えるために階層的クラスター分析でのケースをもとにクラスター数を検討するのが困難であったために、事前にクラスター数を 3 から 15 の範囲で決め、K-means 法によるクラスター分析を行った。その結果、クラスター間の特徴が明確になったのはクラスター数が 7 つの場合であった。7 つのライフスタイル類型は、「小市民型」、「調和型」、「浮遊型」、「自律型」、「挑戦者」、「私は私型」、「プラス思考型」などである（表 7）。なお、表中の数値は、各クラスター内の各変数に対する平均値である。標準化

表 7 クラスター分析によるライフスタイル類型

	小市民型	調和型	浮遊型	自律型	挑戦者	私は私型
トレンド型	-0.56	-0.16	0.33	-0.65	0.15	0.04
チャレンジャー型	0.26	-0.58	0.05	-0.32	0.92	-0.72
社会参加重視型	0.22	-0.47	0.36	0.10	-0.45	-0.63
情報取捨選択型	0.08	-0.39	-0.74	0.28	0.78	0.73
スポーツ志向型	-0.38	-0.39	0.04	0.75	-0.26	-0.22
気まぐれ型	0.26	-0.32	-0.21	-0.30	-0.37	0.95
ロハス型	0.29	0.39	-0.68	0.38	0.04	-0.23
慎重型	0.62	0.07	-0.40	0.02	-0.62	-0.34
ドライな行動	-0.53	0.18	-0.48	0.22	0.06	-0.12
儉約型	-0.30	0.45	-0.21	-0.62	-0.05	0.15
諦観	0.68	0.35	-1.03	0.16	-0.03	0.68
逃避	-0.61	0.23	-0.07	-0.43	-0.32	0.73
伝統的権威主義	0.19	-0.09	-0.32	-0.35	0.64	-0.96
遠慮型	-0.29	0.18	-0.66	0.36	0.04	0.32
同調	-0.11	0.81	-0.11	-0.49	-0.58	-0.32
地元愛着	0.30	-0.51	-0.23	0.05	-0.49	0.05
楽観	-0.16	0.08	-0.32	0.44	0.14	-0.13
安住	-0.65	-0.10	-0.29	0.26	0.37	0.38
反日	-0.06	-0.07	0.19	-0.34	-0.24	0.13
N=1853	248	353	303	250	211	190

されたデータを用いているため、正負の方向と大きさとで、各クラスターに名称を与え、それらをライフスタイル変数にした。類型の意味は以下の通りである。

「**小市民型**」：何よりも家族や家族生活を重視する人々で、地元固執し、野心を示さない、世の中や周囲の人々のストレスや変わりやすい出来事に悩まされないで、安定した幸福な人生を送っている人々であり、周囲の環境とうまく調和した人々のタイプ

「**調和型**」：物事の本質を見極める目や能力を持っており、健康をからめた環境を重視し、周りに左右されず、こだわりをもって生きる人々であり、自分の考えが合わない点があったとしても、皆の意見に合わせていこうとする志向が最も高いのが特徴であるタイプ

「**浮遊型**」：流行に敏感で、社会的で友達が多いが、仕事や家族、健康や環境を含む世の中の物事に対する関心が低く、自ら思い切って何かをやることもなければ、自ら人間関係をよくしようとするわけでもない、世の中を斜めに見ている人々のライフスタイルであると言える。別の言い方をすれば、人からどう見られるかが気になるが、面倒なことを避けたいタイプであり、周りに流されやすい人々である。自分の意見を持っていない、生活の仕方に特定の志向性や信念が乏しいという意味で「浮遊型」と命名した。

「**自律型**」：新しいものや異質なものを、流行などに左右されないが、どちらかというといふと安いものはあまり買わない。伝統的習慣やものをあまり重視しないだけではなく、現代社会や人々の考えなども重視しない。周りに迷惑をかけるよりは、お金を使ってもサービスを利用した方がよいと思っている反面、どのクラスターよりも「今の日本に魅力を感じ、日本が良い社会」だと思っていて、今日が楽しければよく、明日は明日の風が吹くと思う「楽観」的な面が強く、他者からの制約や支配を受けずに、周りに迷惑をかけずに、自分自身で立てた規範に従って自律的に行動する人々のタイプ。

「**挑戦型**」：消費態度・行動としては、値段を重視することもなければ、完全に無視しているわけでもなく、通常商品を買う前、サービスを利用する前によく調べたり、気になったものをすぐネットで調べたりするなど、慎重な態度と行動をとり、流行に左右されない。仕事に生きがい求めて全力を傾けており、その結果として、社会参加や家族との交流が少なく、何事も思い切って挑戦する人々

「**私は私型**」：現代社会や伝統的なものを重視しないし、新しモノや仕事にもチャレンジしない、人間関係や社会生活も重視しない、世の中とは関係なく、人生を半分あきらめて、思いのまま気まぐれに生きている人々の姿が伺える。得た情報を鵜呑みにしないで、自分なりに整理し・判断するタイプであり、マイペースで気まぐれな生活をしているタイプ

「**プラス思考型**」：頑張りすぎず、あきらめず、新しいものや仕事も重視し、家族や社会参加も重視する社会志向の強い良識層の人々であり、仕事と生活のバランス水準が高く、良好な家族関係を維持し、負の経験が少ない、生活が多彩な出来事に満ちている、将来への希望が溢れる、パワフルなポジティブ・シンキング志向の人々のタイプである。情報感度が高く、新しいものや異質なものに強い関心を持ち、新製品を真っ先に手に入れようとする人々。新製品や新しいものの普及において、橋頭堡となる時代の革新者カテゴリーの人々の姿が伺えるため、一見すると、イノベーター理論の5分類の1つであるイノベーター（Innovators：革新者、革新的採用者）に似ているように見えるが、伝統的な習慣やものを重視する点で、イノベーターとは異なる。

日本在住の日本人は、これらの7種類の何れかに分類されるが、各構成要因の得点を用いて、これらの7つのグループを図式で表したのは、図20であり、2020年版JAPAN-LS（JAPAN-Life Style）と言える。

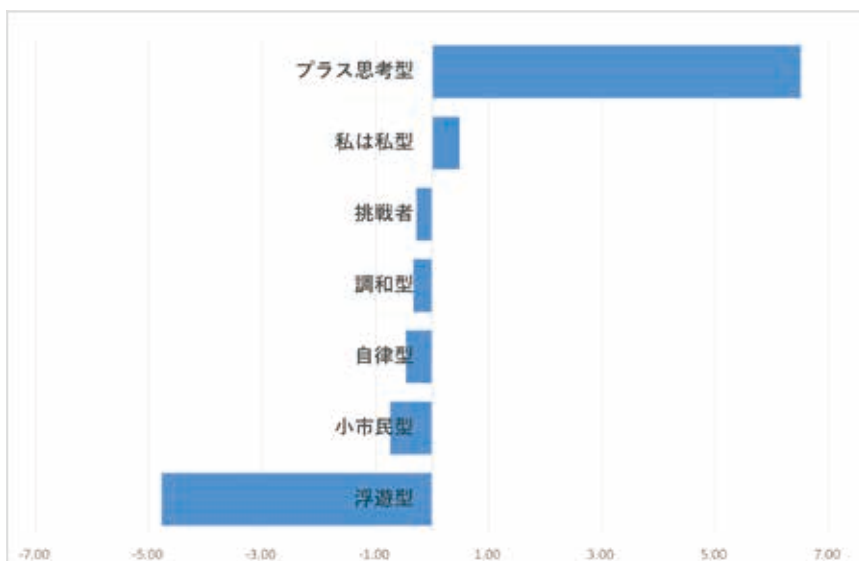


図20 得点高低別のライフスタイル類型

2) ライフスタイルの類型と理想とする仕事

ライフスタイル別に理想とする仕事の比較を行った結果、理想の仕事には有意水準0.1%以上の確率でライフスタイル類型による差異があることが認められた（図21）。

「小市民型」が最も理想とする仕事は「仲間と楽しく働ける仕事」であり、その割合は他のどのライフスタイル類型よりも高い。

「調和型」が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と仲間と楽しく働ける仕事」であり、理想とする割合が同じく 23.5% になっており、全体の中で 2 番目に高く、最も高い「小市民型」の割合との差がほんのわずかであった。

「浮遊型」が最も理想とする仕事は「高い収入が得られる仕事」と「仲間と楽しく働ける仕事」であり、「健康を損なう心配がない仕事」と「働く時間が短い仕事」が続いているが、「健康を損なう心配がない仕事」を理想とする割合は、全体の中で 2 番目に低いのが特徴と言えるだろう。

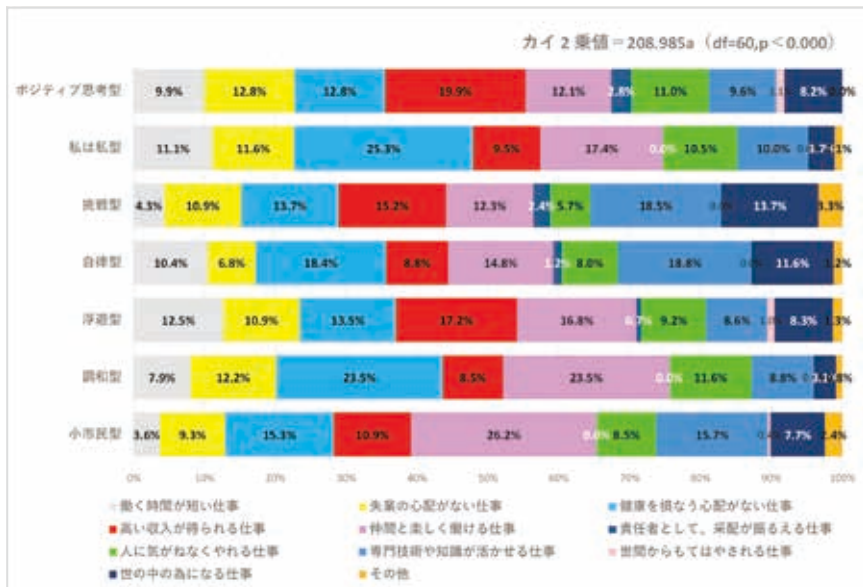


図 21 ライフスタイル類型別の理想の仕事

「自律型」が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」と「専門技術や知識が活かせる仕事」であり、「専門技術や知識が活かせる仕事」を理想とする割合が他のどのライフスタイルセグメントよりも高い。

「挑戦型」が最も理想とする仕事は「専門技術や知識が活かせる仕事」であり、全体の中で 2 番目に高い。「挑戦型」が最も理想とする仕事の第 2 位は「高い収入が得

られる仕事」であり、第 3 位は「健康を損なう心配がない仕事」と「世の中の為になる仕事」である。また、「世の中の為になる仕事」を理想とする割合は、他のどのライフスタイルセグメントよりも高い。

「私は私型」が最も理想とする仕事は「健康を損なう心配がない仕事」であり、第 2 位は「仲間と楽しく働ける仕事」である。「健康を損なう心配がない仕事」を理想とする割合は、他のどのライフスタイルセグメントよりも高いのが特徴である。

「ポジティブ思考型」が最も理想とする仕事は「高い収入が得られる仕事」であり、その割合は他のどのライフスタイルセグメントよりも高い。第 2 位は、「失業の心配がない仕事」と「健康を損なう心配がない仕事」であり、「失業の心配がない仕事」を理想とする割合は、他のどのライフスタイルセグメントよりも高い。また、第 3 位は「仲間と楽しく働ける仕事」であるが、その割合は他のどのライフスタイルセグメントよりも低い。

上記のデータから明らかになったのは、ライフスタイルの類型による理想の仕事の有意差だけであり、それぞれお互いに影響しているかどうか、因果関係があるかどうかはわからない。お互いに影響しているかどうかという因果関係の有無を明らかにするためには、更なる分析と検討が必要である。そこで、以下において、理想とする仕事のライフスタイルへの影響とライフスタイルの仕事への影響を検討するために回帰分析を行った。表 9 の 1 行目は、ライフスタイル類型を従属変数、理想の仕事を独立変数とした回帰分析の結果であり、2 行目は理想の仕事に従属変数、ライフスタイル類型を独立変数とする回帰分析の結果である。回帰分析の結果、当初設定したように、どのような仕事を理想とするかとどのようなライフスタイルであるかがお互いに影響することが分かった（表 8）。

表 8 理想の仕事とライフスタイルの回帰分析結果

変 数 名	β	DF	P	許容度	F 値	多重 R2 乗	調整済み R2 乗
理想の仕事	0.231	10.000	0.000	1.000	10.292	0.230987393	0.048170921
ライフスタイル	0.231	6.000	0.000	1.000	17.19	0.053354352	0.050250596

そこで、以下において、理想の仕事がライフスタイルにどのような影響を与えているか、ライフスタイルが理想の仕事にどのような影響を与えているのかを明らかにするために、まず、ライフスタイルに影響するとされている各要因と理想の仕事のどちらが、ライフスタイルへの影響が大きいかを明らかにするために、ライフスタイル類型を従属変数、諸要因と理想の仕事の独立変数としたカテゴリカル回帰分析を行っ

た(表9)。その結果、性別、地域、年齢、職業、収入を伴う仕事経験、最終役職、経済的ゆとり感、自由時間、現在の仕事や役割への満足感などがライフスタイルの規定要因であり、理想の仕事がライフスタイルに影響を与えていないことが分かった。言い換えると、理想の仕事は、ライフスタイルの規定要因ではなく、本研究の理論枠組みの一部であった「理想の仕事」がライフスタイルに影響するという仮説が棄却されたのである。しかし、一般的に、働いている人にとって、仕事は最大の課題であり、どういう仕事をやっているか、どういう仕事を理想とするかは、その人のライフ

表9 ライフスタイルに影響する要因のカテゴリカル回帰分析モデル

変数名	β	DF	P	許容度
性別	0.183	1.000	0.000	0.746
地域	0.067	7.000	0.000	0.974
未婚既婚	0.015	1.000	0.490	0.496
子供の有無	0.008	1.000	0.701	0.553
年齢(年代刻み)	0.251	4.000	0.000	0.732
通学年数	0.032	1.000	0.318	0.711
学歴	0.027	3.000	0.296	0.716
職業	0.123	6.000	0.000	0.398
収入を伴う仕事経験	0.091	1.000	0.026	0.427
最終役職	0.086	4.000	0.000	0.840
年収	0.006	1.000	0.913	0.742
一ヶ月の支出	0.040	2.000	0.546	0.852
経済的ゆとり感	0.144	2.000	0.000	0.805
健康状態	0.040	2.000	0.474	0.889
自由時間	0.081	3.000	0.000	0.862
自由時間ゆとり感	0.039	2.000	0.478	0.909
自由時間を誰と過ごすか	0.019	1.000	0.399	0.865
現在の仕事や役割満足度	0.059	4.000	0.000	0.930
理想の仕事	0.029	1.000	0.504	0.983
F値	4.272			
多重R2乗	0.434			
調整済みR2乗	0.166			

注: β は標準化係数、DFは自由度、Pは有意確率

スタイルに影響を与えると思われるが、今回の調査結果では、「理想の仕事」がライフスタイルに影響を与えないという結果が得られた。この結果は、現在の仕事はライフスタイルに影響するが、理想の仕事はライフスタイルに影響をしないということを物語っている可能性もあるが、今回の調査では、現在の仕事と理想の仕事の関係やライフスタイルへの影響を確認することもできていないので、今後の調査研究において、再度の検討・検証を行いたいと考えている。

次に、ライフスタイルの理想の仕事への影響を明らかにするために回帰分析を行い、理想の仕事に影響する要因の回帰モデルⅠ（表 3）と比較検討を行った。表 10 は、理想の仕事に影響する各要因とライフスタイル変数を独立変数、理想の仕事に従属変数とし、投入する F の確率を 0.05% 以下、除去する F の確率を 0.1 以上として行ったカテゴリカル回帰分析の結果であり、地域、年齢、職業、収入を伴う仕事経験、ライフスタイルなどが「理想の仕事」の規定要因であることが分かった。また、理想の仕事に影響する各要因の中で、年齢の「理想の仕事」への影響が最も大きく、その次にライフスタイルの影響が大きかった。

モデルⅠ（表 3）とモデルⅡ（表 10）の結果を一目で見てわかることは、モデルⅠでは、「学歴」と「経済的ゆとり感」が理想の仕事に影響を与える要因であったが、モデルⅡでは、理想の仕事に有意な影響を与えていないことがわかる。また、ライフスタイル変数を導入したことにより、モデルの重相関係数が少しだけ大きくなっており、わずかではあるが、説明力が上昇していることもわかる。そして、標準化偏回帰係数を見ると、モデルⅠでは標準化偏回帰係数の値が最も高いのは「年齢」であり、その次に高いのは「学歴」と「職業」であったが、モデルⅡでは、「年齢」の次に高かったのは「ライフスタイル類型であった。また、「地域」はモデルⅠでも、モデルⅡでも理想の仕事に有意な影響を与える要因になっているが、どちらの標準化偏回帰係数を見てもその値が非常に低く、影響があると言い難い結果である。

上記の一連の分析検討の結果、ライフスタイルがどのような仕事を理想とするかに影響することを立証できたと言える。

表 10 理想の仕事に影響する要因のカテゴリカル回帰分析モデルⅡ

変 数 名	β	DF	P	許容度
性別	0.015	1.000	0.539	0.629
地域	0.065	7.000	0.000	0.506
未婚既婚	0.037	1.000	0.232	0.555
子供の有無	0.017	1.000	0.522	0.632
年齢（年代刻み）	0.154	3.000	0.000	0.576
通学年数	0.039	1.000	0.623	0.626
学歴	0.093	3.000	0.132	0.710
職業	0.109	6.000	0.000	0.784
収入を伴う仕事経験	0.124	1.000	0.018	0.662
最終役職	0.125	3.000	0.218	0.692
年収	-0.050	4.000	0.820	0.805
一ヶ月の支出	-0.026	2.000	0.716	0.851
経済的ゆとり感	-0.095	1.000	0.094	0.854
健康状態	-0.019	2.000	0.846	0.854
自由時間	-0.010	1.000	0.843	0.860
自由時間ゆとり感	-0.021	2.000	0.825	0.802
自由時間を誰と過ごすか	0.037	1.000	0.113	0.994
現在の仕事や役割への満足感	-0.050	3.000	0.624	0.871
ライフスタイル類型	0.147	6.000	0.000	0.743
F値	4.917			
多重R2乗	0.349			
調整済みR2乗	0.097			

注： β は標準化係数、DFは自由度、Pは有意確率

Ⅳ. 結論と考察

本研究は、日本人の理想の仕事の実態とその影響要因を検討したものである。主な結果と課題は以下の通りである。

- (1) 日本人のライフスタイルの規定要因は、性別、地域、年齢、職業、収入を伴う仕事経験、最終役職、経済的ゆとり感、自由時間、現在の仕事や役割への満足感などであった。
- (2) 男女別に理想の仕事と比較した結果、性別による有意差があることが認められたが、理想の仕事に影響すると思われる多くの要因を用いてカテゴリカル回帰分析を行った結果、性別が有意な影響を与えなかった。
- (3) 「理想の仕事」に影響すると思われる諸要因を用いてカテゴリカル回帰分析を行った結果、地域、年齢、職業、収入を伴う仕事経験、ライフスタイルなどが日本人の「理想の仕事」の規定要因であり、「年齢」と「ライフスタイル」が「理想の仕事」への影響が最も大きい要因になっている。

以上、高齢化や AI などのデジタル技術の普及、コロナの拡大などにより、大きく変化している日本人の理想とする仕事の全体像とその規定要因を明らかにした。いずれも、理想の仕事がしやすい制度や環境（職場環境、社会環境）を整備するためのヒントになる情報であると言えるだろう。

また、本稿で取り上げた理想とする仕事に見られる変化や動きは一時的な現象であるのか、今後も続く大きな変化なのか、議論が分かれるところであるが、筆者は少子高齢化や AI 技術の発展など社会変化に伴う大きな変化であり、今後も一定期間続くものであると考えている。

筆者は幼少の頃から日本に憧れていたこともあり、日本に来る前から日本の会社員は残業する人が多いことを知っていたが、実際に日本の企業に就職し、働き始めた時、定時に帰る人がいないのを見て「なるほど」と実感した。仕事し始めて 2 年目の時、ある先輩が「私の毎月の残業代は本給より高い」と自慢していたのを見て、「残業で稼ぐ」という意識が根付いていることに大変驚いたのは記憶に新しい。今では在宅勤務の増加により、仕事を家に持ち帰っている人が多いのが現状であり、「残業代で稼ぐ」人たちにとって記録に残らない残業が増え、一層厳しい時代になっているが、今後、残業が少ない中国同様に副業をする人が増えるのかどうかその成り行きが興味深いところである。

他方、現在の日本では、労働時間を短縮したり、働く時間や場所の選択肢を増やしたりする企業が増えていると同時に、コロナの影響による新しい働き方として、「テ

レワーク」、「パラレルキャリア」、「ダウンシフト」、「スローワーク」などが注目されている（アデコグループ，2020；インテージ，2020 等々）。本稿で論じたのは，理想の仕事についてのみであり，テレワークなどの新しい働き方や現在の仕事が理想の仕事であるかどうかなどについて論じることができていない。

また，個人が理想とする仕事や働き方が大きく変わることによる企業の変化は，コミュニティの在り方にも大きな変化をもたらすと思われる。しかし，今回の調査研究では，このような変化がもたらす影響や，どのような職場環境が理想か，どのような制度がある仕事かなどを把握できていない。

他方では，ライフスタイルは不変的なものではなく，時代と共に変化するものであり，時代の変化を表す指標であるとも言われている。本研究は，筆者が2020年に実施した調査データに基づくものである。冒頭でも述べたように，調査実施時期はコロナ感染拡大中であり，人々のライフスタイルそのものが変化し始めた時期であり，With コロナ生活が長引いていることで，人々のライフスタイルがさらに多様化している可能性が高い。今回の論文では，ライフスタイルが時代と共に変わるものかどうか，時代と共に変わる場合，理想の仕事も変わるのかなどについては，分析することも，検討することもできていない。

上記の点について今後も継続的に研究を深めたい。また，今回作成したカテゴリカル回帰モデルの説明力は十分とは言えず，モデルの改善も今後の課題にしたいと考えている。

参考文献

- Adecco Group (2020) "Resetting Normal: Defining the New Era of Work." <https://www.adecogroup.com/reset-normal/>, 2020 年 1 月 4 日閲覧。
- Akaike, H. (1973) "Information Theory and an Extension of the Maximum Likelihood Principle." In *Proceedings of the 2nd International Symposium on Information Theory*, B. N. Petrov and F. Csaki, eds. Budapest: Akademiai Kiado. 267-281.
- _____ (1978) "A Bayesian Analysis of the Minimum AIC Procedure." *Annals of the Institute of Statistical Mathematics*, 30: 9-14.
- Arbuckle, J. L., and Wothke, W. (1999) *Amos Users' Guide*. Chicago, IL: Small Waters.
- Azar, B. S. (1989) *Understanding and using English grammar*, Vol. B (2nd Ed.). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall Regents. (エイザー, B.S. 小田眞幸 (訳) (2005). 『エイザーのわかって使える英文法 改訂版』下巻 桐原書店)
- Arbuckle, J.L. (2019) 『IBM® SPSS® Amos™ 26 ユーザーズ ガイド』 <https://www.ibm.com/support/pages/spss-amos-26-documentation>, 2020 年 11 月 11 日閲覧。

BMAS (2016) Neue Arbeitsmarktprognoze 2030 vorgestellt.

<https://www.bmas.de/DE/Presse/Meldungen/2016/arbeitsmarktprognoze.html>, 2020 年 12 月 10 日閲覧。

Browne, M. W. and Cudeck, R. (1993) "Alternative Ways of Assessing Model fit." In Bollen, K. A and Long, J.S., eds., *Testing Structural Equation Models*. Newbury Park, CA: Sage, 136-162.

党俊武, 李晶, 张秋霞, 罗晓晖, 2019 《中国老年人生活质量发展报告 (2019)》, 社会科学文献出版社。

Hendricks, J. and L. R. Hatch (2006) "Lifestyle and Aging." In Binstock, R. H. and George, L. K., eds., *Handbook of Aging and the Social Sciences*. Amsterdam: Academic Press, 301-319.

Hu, L. & Bentler, P. (1999) "Cutoff Criteria for Fit Indices in Covariance Structure Analysis: Conventional Criteria Versus New Alternatives." *Structural Equation Modeling*, 6, 1-55.

アーキ・ジャパン (2019) 『【自分の未来は自分が決める！】新卒入社社員の半数以上が3年以内に退職していることが判明！現代の若者が求める理想の仕事とは？』, <https://akijapan.co.jp/press/577.html>, 2021 年 1 月 15 日閲覧。

狩野 裕 (1997) 『AMOS, EQS, LISREL によるグラフィカル多変量解析』, 現代数学社。

厚生労働省 (2014) 「働きやすい・働きがいのある職場づくりに関する調査報告書」, https://www.mhlw.go.jp/chushoukigyoku_kaizen/investigation/report.pdf, 2021 年 1 月 12 日閲覧。

東北活性化研究センター (2013) 『東北における若者の就労に関する調査研究——若者の「多様な仕事・働き方」の可能性と実現方策報告書』, <https://www.kasseiken.jp/pdf/library/guide/24fy-0501.pdf>, 2020 年 12 月 31 日閲覧。

インテージ (2020) 『with コロナがもたらした新しいライフスタイル——行動制限が長期化する中で見られた生活者の意識の変化とは？』, <https://www.intage.co.jp/gallery/covid19-dcgs-5/>, 2021 年 1 月 15 日閲覧。

リクルートキャリア (2018) 『転職活動者に聞く, 仕事とプライベートの理想のあり方とは？仕事中心』は 1 割未満「働き方」から「生き方」へシフト』, <https://www.recruitcareer.co.jp/news/20180726.pdf>, 2021 年 1 月 15 日閲覧。

経済産業省 (2018) 『通商白書 2017』。

Merton, R. K. (1957) *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*. Glencoe, Ill: The Free Press (森東吾ほか訳 (1961) 『社会理論と社会構造』, みすず書房。)

马忠东, 吕智浩, 叶孔嘉 (2011) 「劳动参与率与劳动力增长: 1982 ~ 2050 年」, 『中国人口科学』第 1 卷, 11-27 頁。

- maimaidata(2020)『寻找交点——2020 脉脉招聘中高端人才趋势蓝宝书』, 脉脉人才智库与人才数据研究院。
- NHK 放送文化研究所 (2020)『現代日本人の意識構造 [第九版]』, NHK 出版。
- Novak, T. P., and B. MacEvoy (1990) "On Comparing Alternative Segmentation Schemes: The List of Values and Life Styles (VALS)." *Journal of Consumer Research*, 17, 105-109.
- 内閣府 (2014)『労働力人口と今後の経済成長について (「成長・発展」補足資料)』, https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/0312/shiryuu_02.pdf, 2021 年 1 月 03 日閲覧。
- _____ (2014)『平成 26 年度 国民生活世論調査』, <https://survey.gov-online.go.jp/h30/h30-life/2-3.html>, 2021 年 1 月 15 日閲覧。
- _____ (2018)『平成 30 年度 国民生活世論調査』, <https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-life/2-3.html>, 2021 年 11 月 10 日閲覧。
- _____ (2019)『令和元年版高齢社会白書』。
- 野村総合研究所 (2015)「日本の労働人口の 49% が人工知能やロボットで代替可能に——601 種の職業ごとにコンピュータ技術による代替確率を試算=」, https://www.nikkei.com/article/DGXLASDZ02HTU_S5A201C1TJC000, 2020 年 11 月 13 日閲覧。
- 小田利勝 (2004)『サクセスフル・エイジングの研究』, 学文社。
- 夏扎提古丽沙吾提^{シャザディグルリシャウティ} (2014)『マスコミ理論とライフスタイル——新疆ウイグル自治区における調査研究』, 学文社。
- _____ (2020), 「サードエイジャーの日常的コンピテンスの構造——中国新疆ウイグル自治区における調査研究に基づいて」, 『青山総合文化政策学』通巻第 18 号, 3-33 頁。
- 豊田秀樹 (編著), (2007)『共分散構造分析 [Amos 編]』, 東京図書。
- _____ (編著), (2011)『共分散構造分析 [疑問編]』, 朝倉書店。
- Tunstall, Jeremy(1965) *Old and Alone: A Sociological Study of Old People*. London: Routledge & Kegan Paul. (光信隆夫訳『老いと孤独——老年者の社会学的研究』垣内出版, 1978 年。)
- 田藤裕祐 (2017)「日本社会における仕事の価値の長期的な推移」, 『日本労働研究雑誌』第 684 号, 49-58 頁。
- 高橋美保 (2006)「働くこと」の意識についての研究の流れと今後の展望——日本人の職業観を求めて」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 45 巻, 149-157 頁。
- 田藤裕祐, 宮田尚子 (2015)「仕事の価値の布置と長期的変化——「日本人の意識」調査の 2 次分析」, 『社会学評論』66(1), 57-72 頁。
- United Nations (2020) World Population Prospects: The 2019 Revision. <https://www.unpopulation.org>, 2020 年 1 月 3 日閲覧。
- 綿貫登美子 (2014)「多様化する高齢期のライフスタイルと生きがい——高齢者の状況

に配慮した就業促進と能力活用取組み」,『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』, 5-25。

王非, 赵丽秋, 赵忠 (2016) 「全面二孩政策不足以缓解我国人口老龄化问题」,『Journal of Translation from Foreign Literature of Economics』, 34-39 頁。

张车伟, 蔡翼飞 (2016) 「中国“十三五”时期劳动供给和需求预测及缺口分析」,『人口研究』第 40 卷, 38-56 頁。

謝辞

本研究は科学研究費 20K02069 の助成を受けたものであり, 感謝を申し上げる。

Research and Studies on the Ideal Work in the “With Corona” Era

by SHAZADIGUL SAWUT

The purpose of this study is to clarify the structure of Japanese ideal work and Lifestyle and to determine the dominant factor about them. In this study, I used area, gender, and age, allocation method that matched the demographic composition to sample. The completed samples were 1837. Using these samples, I made cross tabulation, χ -square test, principal component analysis, co-variance structure analysis, cluster analysis, and regression analysis.

The main results are as following: 1) The dominant factors to Japanese Lifestyle are gender, area, age, job, experience of job with income, final position, amount of free time, satisfaction for present job and etc.; 2) Cross tabulation showed ideal job and gender has a significant correlation, but regression analysis showed that gender is not a dominant factor to ideal job; 3) The result of regression analysis showed that the dominant factors were area, age, job, experience of job with income and Lifestyle . Lifestyle and age were the most dominant factors to the ideal job.